

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VI - 2

1979

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VI - 2

1979

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

## はじめに

県下のは場整備事業に伴う発掘調査も、新たな展開として蒲生、神崎郡が加わり、調査件数が増大しつつある。同時に新たな資料の増加は、調査結果をまとめ、社会に還元する作業というか、義務の遂行が困難さを増してきた。しかし整備の結果は、遺跡の所在する各々の地域はもちろん、県内において、今後、近江の生き立ちを考えるうえで重要な課題を提示するものが多くあった。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言を得た。ここに謝意を表したい。

昭和54年3月

滋賀県教育委員会  
文化財保護課

課長 沢 悠光

## 例　　言

1. 本報告は、昭和53年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査のうち、県農林部の費用負担にかかる2遺跡の成果を収載したものである。
2. 現地調査にあたっては、地元教育委員会、自治会から多大の協力を得た。

現地調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師大橋信弥が担当し、志那中遺跡については、別所健二、谷口徹氏、正楽寺遺跡については、守山市教育委員会社会教育課主事山崎秀二氏と平井寿一氏の協力を得た。

3. 本書の編集は、大橋が担当し、執筆については、大橋、谷口、平井のほか大橋美和子が分担した。

# 目 次

## 序 例 言

### 第1章 草津市志那中遺跡

1.はじめに	1
2.検出遺構	3
(1) 堀立柱建物跡	3
(2) 井戸跡	5
(3) 上坑跡	7
(4) 不明遺構	8
(5) 溝跡	8
3.出土遺物	10
(1) 出土土器	10
(2) 出土木製品	21
4.おわりに	23

### 第2章 守山市正楽寺遺跡

1.はじめに	25
2.調査経過	27
3.検出遺構	27
(1) 1次遺構面	27
(2) 2次遺構面	31
4.出土遺物	31
5.おわりに	32

## 挿図目次

### 草津市志那中遺跡

挿図1 位 置 図	1
挿図2 トレンチ設定図	2
挿図3 遺構配置図	4
挿図4 SB 1 平面実測図	5
挿図5 SE 2、SE 6、SK 4、SK 3、SD 1、SD 2、SD 3、SX 2 断面実測図	6
挿図6 SE 3、SE 8 平面断面実測図	7
挿図7 KT-2 平面実測図	8
挿図8 SE 4 出土土器実測図(1)	11
挿図9 SE 4 出土土器実測図(2)	12
挿図10 SE 3、SE 5、SE 8、SE 1、SK 1、SD 1～SD 5 出土土器実測図	13
19、20 (SE 3)、21～29 (SE 5)、30～32 (SE 8)、33 (SX 1)、34 (SX 1)、35～37 (SD 1)、38、40 (SD 2)、41、42 (SD 3)、43～45 (SD 4)、46～50 (SD 5)	
挿図11 SD 6～SD 8 出土土器実測図	14
51～53 (SD 6)、54～70、72～75 (SD 7)、76、77 (SD 8)	
挿図12 SD 7、SB 3～SB 5、137-T-2 杜穴内、包含層出土土器実測図	15
71 (SD 7)、78、79 (SB 3)、80～83 (SB 4)、84・85 (SB 5)、86～88 (137-T-2 杜穴内)、89(137-T-2 包含層)、90(137-T-2 包含層第1層)、91、92、94～114、126(137-T-2 包含層第2層)、93、130～132 (137-T-2 包含層第4層)	
挿図13 137-T-2 包含層出土土器実測図	16
115～125、127～129 (137-T-2 包含層第2層)	16
挿図14 出土木製品実測図 (W 1～W 8)	17
挿図15 出土木製品実測図 (W 9～W 15)	18
挿図16 出土木製品実測図 (W 16～W 20)	19

### 守山市正樂寺遺跡

挿図1 位 置 図	25
挿図2 トレンチ設定図	26
挿図3 各トレンチ遺構実測図	28
挿図4 トレンチ断面実測図	29
挿図5 出土遺物実測図	33

## 図版目次

### 草津市志那中遺跡

- 図版1 志那中遺跡 1：調査前景（北より）  
2：調査前景（東より）
- 図版2 志那中遺跡 1：KT-2 全景（南より）  
2：136-T-1 沼沢地東壁断面（西より）
- 図版3 志那中遺跡 1：135-T-1 全景（北より）  
2：135-T-1 全景（南より）
- 図版4 志那中遺跡 1：136-T-3 全景（北より）  
2：136-T-3（南より）
- 図版5 志那中遺跡 1：136-T-1 全景（南より）  
2：136-T-1 全景（北より）
- 図版6 志那中遺跡 1：137-T-2 全景（北より）  
2：137-T-2 南半部全景（北より）
- 図版7 志那中遺跡 1：137-T-2 全景（南より）  
2：SB4 近景（北より）
- 図版8 志那中遺跡 1：SD5、SD6 近景（北より）  
2：SE5、SB7～SB9 近景（南より）
- 図版9 志那中遺跡 1：SE2 近景（北より）  
2：SE3 遺物出土状況（南より）
- 図版10 志那中遺跡 1：SE3 近景（南より）  
2：SE4 近景（南より）
- 図版11 志那中遺跡 1：SE6 近景（南より）  
2：SE9 検出状況（北より）
- 図版12 志那中遺跡 1：SK1 近景（東より）  
2：SD1、SD2 近景（西より）
- 図版13 志那中遺跡 1：礎板検出状況（西より）  
2：礎板検出状況（北より）
- 図版14 志那中遺跡 1：136-T-3 東壁断面（西より）  
2：136-T-1 東壁断面（西より）
- 図版15 志那中遺跡 幹線排水路試掘トレンチ断面実測図
- 図版16 志那中遺跡 136-T-3、135-T-2、136-T-2、136-T-4 平面断面実測図
- 図版17 志那中遺跡 137-T-2 平面実測図

図版18 志那中遺跡 135-T-1、136-T-1 平面断面実測図

図版19 志那中遺跡 137-T-2 東壁断面図

## 守山市正楽寺遺跡

図版20 正楽寺遺跡 1: 調査前景 (東より)

2: 試掘坑掘削状況 (北より)

図版21 正楽寺遺跡 1: Kトレントレンチ全景 (南より)

2: Fトレントレンチ全景 (南より)

図版22 正楽寺遺跡 1: Eトレントレンチ全景 (北より)

2: EトレントレンチSD1近景 (西より)

図版23 正楽寺遺跡 1: Bトレントレンチ全景 (南より)

2: Dトレントレンチ全景 (西より)

図版24 正楽寺遺跡 1: Dトレントレンチ近景 (西より)

2: Jトレントレンチ全景 (南より)

図版25 正楽寺遺跡 1: Jトレントレンチ東断面 (西より)

2: Bトレントビット近景 (南より)

# 第1章 草津市志那中遺跡

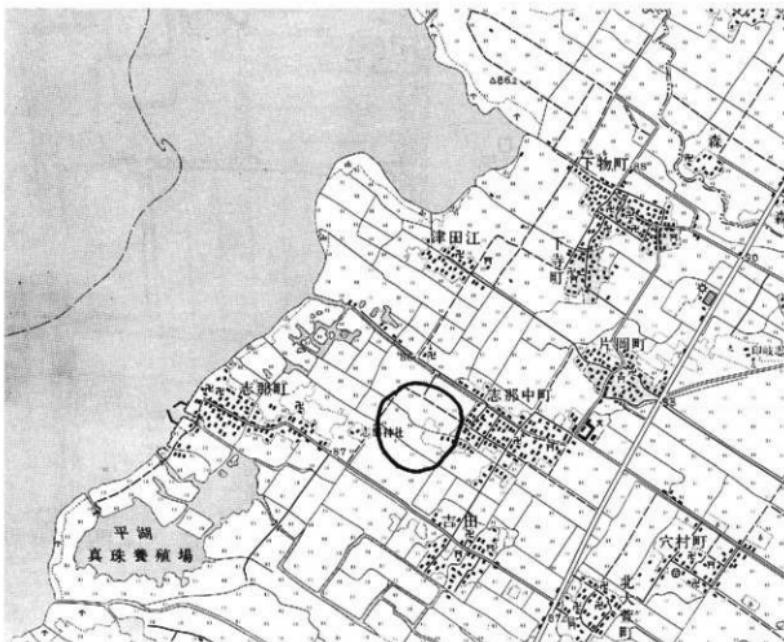
## 1. はじめに

本報告は、草津市志那中町所在、志那中遺跡についての、昭和53年度の調査概要をまとめたものである。本調査は、昨年度に引きつづき、県営は場整備事業に先立ち、幹線排水路、支線排水路部分について実施したもので、まず幹線排水路については、30m～50m間隔で10m×10mのトレンチを6ヶ所設置し、3本の支線排水路については20m間隔に4m×10mの試掘坑を設定し、遺構が検出された部分は順次拡張するという方法をとった。その結果、135、136、137支線排水路を中心に、掘立柱建物、井戸、土坑、溝など多くの遺構と、それに伴う遺物を検出した。調査にあたっては地元志那中町の協力を得たほか、下記の諸君の協力を得た。記して謝意を表したい。

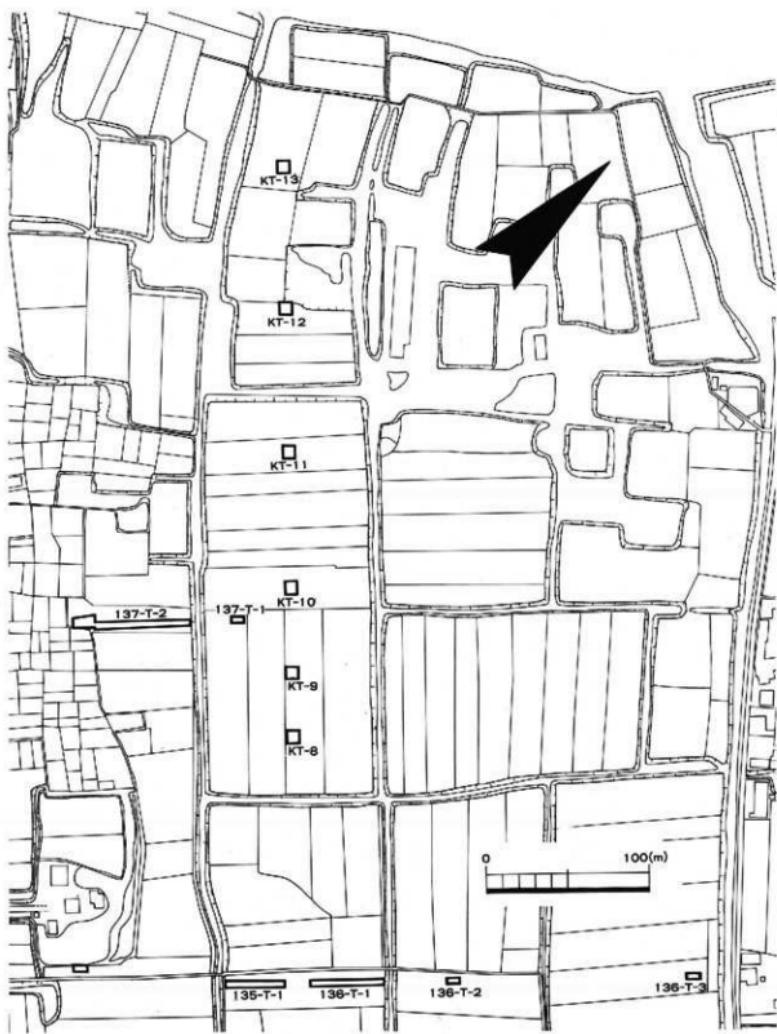
水野 敏昭 三宅 治 大崎 義彦 美濃部 力 中村 明 山本 芳正 国松 千夏

福井 昭彦 出湯 栄治 社 清

(大悟信弥)



### 第1圖 位 置 圖



第2図 トレンチ設定図

## 2. 検出遺構

調査トレンチのうち、遺構を検出したのは135-T-1、136-T-1、136-T-3、137-T-2の各トレンチで、~~柱立柱建物跡~~ 9棟、井戸跡7基、土坑跡3基、溝跡8条、不明遺構3基などと、他に多数のピットを発見した。前年度調査と同様、弥生時代から鎌倉時代の各期の井戸跡が多く検出されており、注目される。なお、幹線排水路に設定した各トレンチでは、近現代のものとみられる暗渠排水施設が床土直下で検出されたが、明確な遺構の検出はなく、KT-1・2ではみられなかった砂層がKT-3以降検出され青灰色粘土の堆積もしだいに厚くなっている琵琶湖がかつてこのあたりまで入っていたことが推測される。

### (1) 据立柱建物跡

137-T-2で、かなりの密度で分布するほか、他のトレンチでは密度は低く、集落の広がりを考える上で注目される。

**S B 1** 衍行3間、梁行1間以上の規模をもつ、ベタ柱の部分で柱間寸法は、衍行で2.0m、梁行で1.7mであった。方位はN-41°-Eをとり、柱穴掘り方は、径25cm前後、深さは12cmであった。135-T-1の南よりに所在し、北16mにSE2、SE1が所在する。時期は明確にできないが、SD2(弥生後期)、SD3(古墳後期)を切り込んで構築されており、他と同じく13世紀代の可能性が高い。

**S B 2** 136-T-1の北よりで検出したもので、衍行1間以上、梁行2間の規模をもつ。柱間寸法は衍行で2.1m、梁行で1.6mをはかり、方位はN-79°-Eであった。柱穴掘り方は、径40cm前後の円形を呈し、柱根は径20cm前後、深さ15cmをはかる。

**S B 3** 137-T-2の南よりに所在する建物で、東半は調査域の外にある。周囲には井戸、土坑が集中して分布し、南側は幅7mの大溝が東西に走る。溝の南側は遺構の密度は薄く、集落を区画する可能性が高い。衍行3間、梁行1間以上の南北棟とみられ、柱間寸法は梁行で1.25m、衍行で1.1mであった。方位はN-26°-Eをとり、柱穴掘り方は径28cm前後、柱穴は径15cmをはかる。柱穴内より13世紀後半代の土師器皿などが出土しており、その前後の時期が推定される。

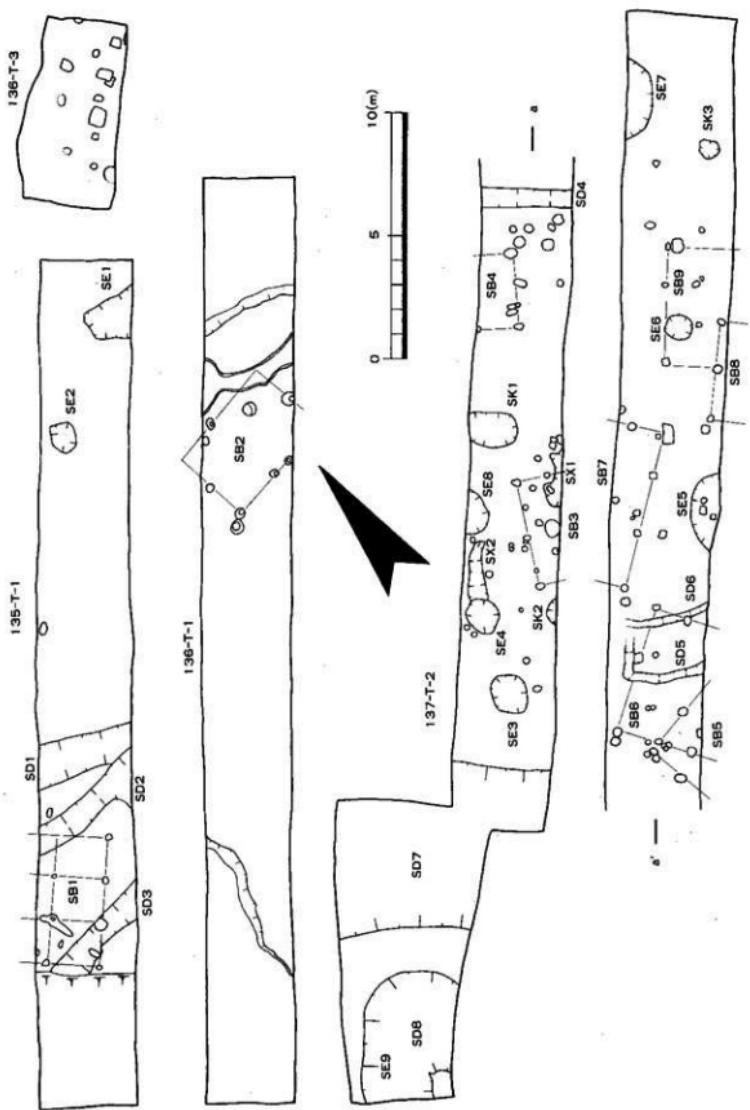
**S B 4** SB3の北6.1mに所在する建物跡で、西半は調査域外で、全様はうかがえないが、衍行1間以上、梁行2間の東西棟とみられる。柱間寸法は衍行で1.8m、梁行で1.8mをはかり、方位はN-55°-Wをとる。柱穴掘り方は、径50cm前後、深さ30cm前後をはかる。北側に、ほぼ同じ方位をとる幅75cm前後の直線的な溝が(S D 4)が発見されており、建物と関連する可能性がある。柱穴内より13世紀後半代とみられる土師器皿などが出土している。

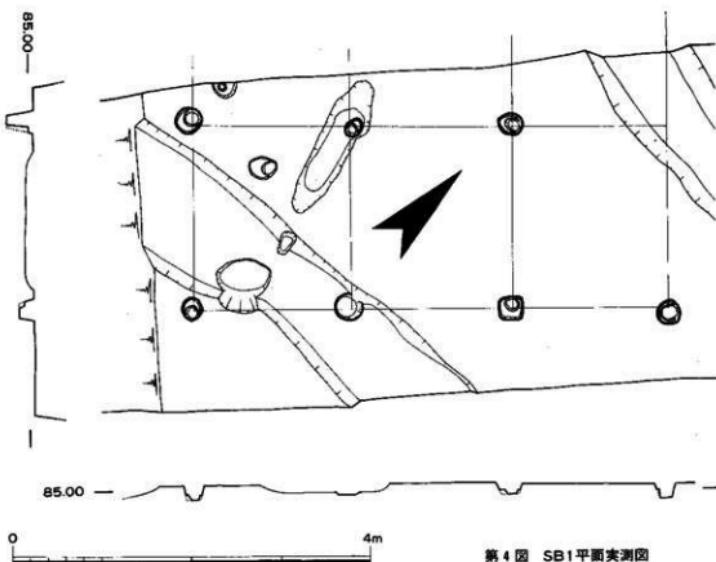
**S B 5** SD4をはさんで、SB4の北に所在する建物で、東半は調査域外にあり、全様はうかがえない。衍行、梁行とも1間以上で、柱間寸法は衍行で2.0m、梁行で1.4mであった。方位はN-76°-Wをとり、柱穴掘り方は径30cm、深さ25cmをはかる。柱穴内より、13世紀後半代の土師器皿などが出土しており、ほぼその前後の時期が推定される。

**S B 6** SB5に一部重複して所在する建物で、東側の一部が調査域外にある。衍行推定3間、梁行2間の南北棟で、柱間寸法は衍行で2.0m、梁行で1.6mであった。柱穴掘り方は一辺30cm前後で、柱根径は15cm前後、深さ30cmをはかり、方位はN-56°-Eで、SB7とほぼ一致している。

**S B 7** SB6の北に隣接して所在する建物で、衍行1間以上、梁行2間の南北棟で、N-56°-Eの方位をと

第1図 連続記録図





第4図 SB1平面実測図

る。柱間寸法は桁行は不明であるが、梁行は2.2mと比較的広い。柱穴掘り方は径30cm前後で、柱根径は20cm前後であった。柱穴内より、13世紀後半代の土師器片が出土しており、ほぼその時期に推定される。

**S B 8** S B 7 の東に所在する建物で、北端の一部のみを検出しており、桁行1間以上、梁行2間の南北棟とみられる。方位はN-44°-Wをとり、柱間寸法は、梁行で1.8mであった。柱穴掘り方は径10cmで、深さ15cm前後であった。北側にS E 6 が所在し、関連するとみられる。

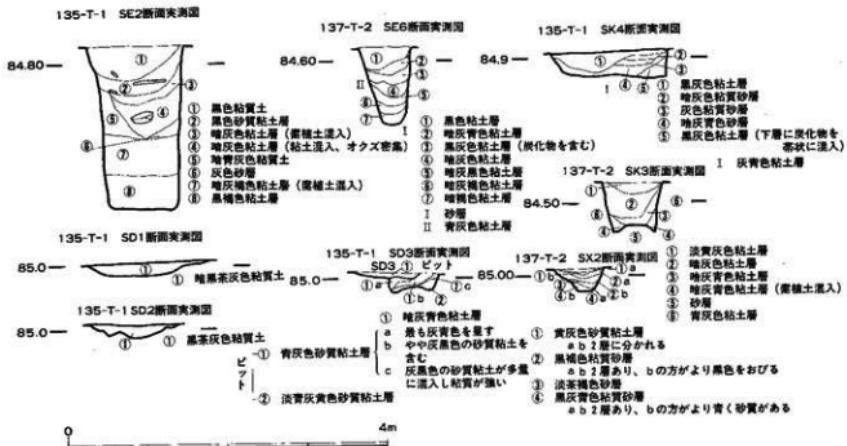
**S B 9** S B 8 の北に一部重複して所在する建物で、北端の一部のみを検出した。方位はS B 8 とほぼ同様で、N-49°-Wをとる。桁行1間以上、梁行2間の南北棟で、柱間寸法は梁行で1.7mをはかる。柱穴掘り方は径25cm、深さ10cmをはかる。

## (2) 井 戸 跡

井戸跡は135-T-1で2基、137-T-2で5基が検出され、弥生後期から鎌倉時代までの各期のものが認められた。

**S E 1** 135-T-1の北端で検出した井戸で、東側が調査域の外に所在する。東西1.7m以上、南北1.5m、深さ30cmのややいびつな長隋円形の掘り方をもつとみられる。ただし、出土遺物はなく、時期は明確にできなかつた。

**S E 2** SE 1 の西3.5mに所在する、ややいびつな、径約1.3mの円形の掘り方をもつ井戸である。井枠にかかる施設はなく、素掘りとみられるが、深さは2.2mをはかる。層序は、およそ7層に類別され、第1層から第4層までは二次的堆積で、以下は自然堆積とみられる。前者に木器、土器が多く含まれていた。第1層は黒色粘質土、第2層は黒色砂質粘土、第3層は暗灰色粘土、第4層は暗灰色粘土、第5層は暗青灰色粘質土、第6層が



第5図 SE2, SE6, SE4, SK3, SD1, SD2, SD3, SX2  
断面実測図

灰色砂質土、第7層が暗灰褐色粘質土、第8層が黒褐色粘質土であった。出土遺物は板材、棒材などの木製品と土器などで、土器は弥生時代後期のものであった。

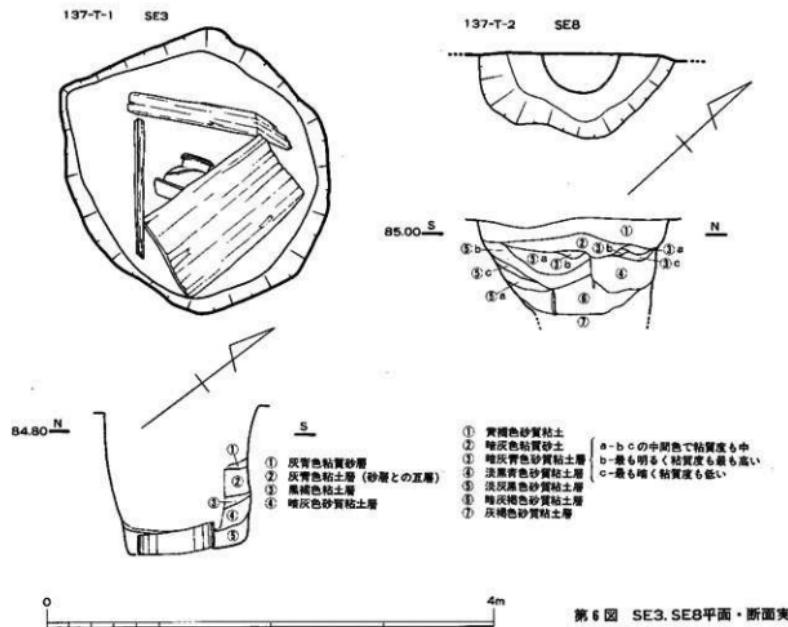
**S E 3** 137-T-2の南端より検出された。径1.4mのややいびつな円形の井戸である。深さは1.2mと浅く、底に径58cm、高さ22cmの曲物が1段だけ埋設されており、これが円形曲物型井戸であることが判明する。調査の手ちがいで、層序の確認できたのは一部であるが、第1層が灰青色粘質砂土、第2層が灰青色粘土、第3層が黒褐色粘土、第4層が暗灰褐色粘質土であった。

出土遺物は少なく、黒色上器、土錐、各1点を図示するにとどまった。ほぼ13世紀前半代のものとみられる。

**S E 4** S E 3の北2.0mに所在する。径1.3m、深さ1.25mのややいびつな円形素掘り井戸である。北側に幅60cm、長さ2.5mの溝状構造(S X 2)が付属しており、関連する施設とみられる。埋土は断面崩壊のため、層序は明確にできなかった。出土遺物は多く、第4、第5層出土の壺、甕、器台、高壙など18点を図示できた。弥生後期後半代のものとみられる。

**S E 5** 137-T-2の中央で検出した円形素掘り井戸で、東半は調査域の外にある。径3.2m、深さ60cmをはかり、埋土は4層に類別される。第1層が淡青黑色粘土、第2層が淡灰黑色粘土、第3層が淡灰黑色粘土、第4層が暗褐色土であった。第1層、第2層より黒色土器碗、七輪器皿、羽釜、土錐などが出土し、ほぼ13世紀前半代の時期が考えられる。

**S E 6** S E 5の東に所在する径1.0m、深さ98cmの円形素掘り井戸である。埋土は7層に類別され、第1層が黒色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が黒灰色粘土、第4層が暗灰色粘土、第5層が暗灰黑色粘土、第6層が暗灰褐色粘土、第7層が暗灰色粘土である。出土遺物は全くなく、時期を明らかにすることはできなかった。



第6図 SE3, SE8平面・断面実測図

**SE7** 137-T-2の北端で検出した推定径4.0mの円形掘り方をもつ素掘り井戸とみられる。深さは70cmと浅く、層序は大きく4層に分別される。第1層は青灰色粘土質、第2層が黒褐色粘土、第3層が灰褐色粘土、第4層が暗灰色砂質土であった。ただし出土遺物はなく、時期を特定できなかった。

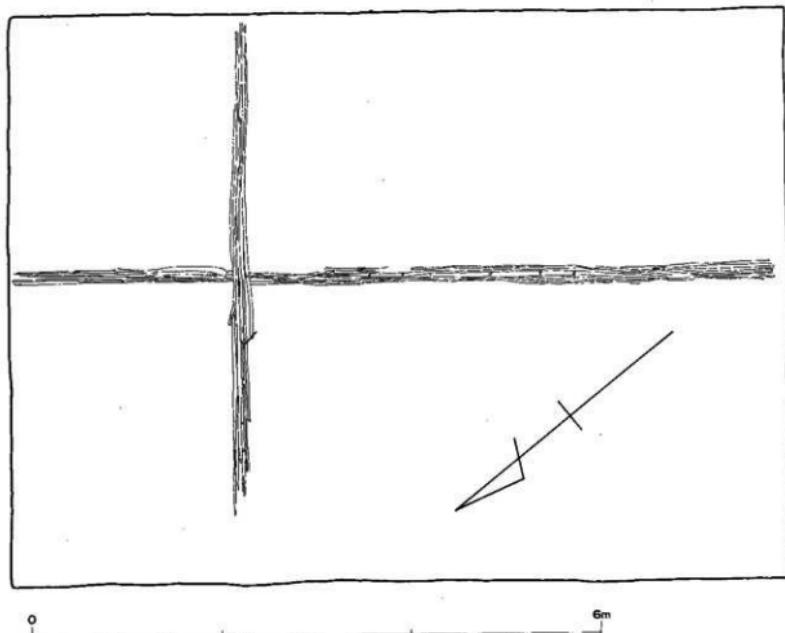
**SE8** SE4の北2.7mに所在する径1.7m、深さ92cm以上の円形掘り方をもつ井戸で、中央に内径70cmの曲物を置いており、円形曲物型井戸とみられる。崩壊が激しく先掘できなかつたが、埋土は7層に大別され、第1層は黄褐色砂質粘土、第2層が暗灰色粘土質、第3層が暗青色砂質粘土、第4層が淡黒褐色砂質粘土、第5層が淡灰黒褐色砂質粘土、第6層が暗灰褐色砂質粘土、第7層が灰褐色砂質粘土であった。出土遺物は甕(常滑)、土師器皿、土鍤などで、おおよそ13世紀前年代が考えられる。

### (3) 土坑跡

137-T-2の建物集中地域に、多くのビットに混在して、3基の土坑を検出した。

**SK1** 137-T-2の南より所在する、東西2.1m以上、南北1.5m、深さ34cmの隋円形土坑である。埋土は第1層が黄褐色砂質粘土、第2層が暗灰色粘土質砂土、第3層が暗灰色砂質粘土であった。出土遺物で、図示できたのは土鍤1点のみで、13世紀代のものとみられる。

**SK2** SB2の西に接して所在する。径1.5m前後、深さ10cm以上の円形土坑である。東半が調査域外で、埋



第7図 KT-2平面実測図

土は黄褐色砂質粘土であった。

**S K 3** 137-T-2の北端、S B 9の北5.2mに所在する。径90cm、深さ60cmの円形土坑である。埋土は、第1層は淡黄灰色粘土、第2層が暗灰色粘土、第3層が暗灰青色粘土、第4層が暗灰青色砂質粘土であった。出土遺物はなかった。

#### (4) 不明遺構

遺構の性格の不明なものを、ここに一括して説明しておきたい。

**S X 1** 137-T-2の南より、S B 3に重複して所在する、東西0.8m以上、南北2.5mの不整形の落ち込みである。深さは60cmをはかり、出土遺物で図示できたのは土鏡1点のみで、その形態から奈良時代から平安時代のものとみられる。

**S X 2** S E 4の北側に接続する、幅60m、長さ2.5m、深さ30cmの短かい溝状の遺構である。S E 4に関連するものとみられるが、性格は不明である。埋土は4層に類別され、第1層が黄灰色砂質粘土、第2層が黒褐色粘質砂土、第3層が淡茶褐色砂土、第4層が黒灰青色粘質砂土であった。出土遺物はなかった。

#### (5) 溝跡

各トレンチで溝状遺構が検出されているが、ここでは遺物の出土をみた、8条の溝について、簡単に解説しておきたい。

**S D 1** 135-T-1の南よりを、東西流する幅1.5m、深さ15cmの浅い溝である。埋土は暗黒茶灰色粘質土で、出土遺物は、須恵器坏身、土鏡などで、およそ8世紀後半代とみられる。

**S D 2** S D 1の南に所在する溝でS D 1の埋没後、これを切り込んで形成されている。幅1.2m、深さ16cmを

ばかり、東西流するとみられる。埋土は黒茶灰色粘質土で、出土遺物は、壺、高杯、甕など岡示できたが、弥生時代後期後半のものであろう。

**S D 3** S D 2 の南40mを東西流する。幅1.04m、深さ8cmの浅い溝である。埋土は暗灰青色粘土で、出土遺物は、須恵器壺身2点のみで、6世紀前半～7世紀前半とみられる。

**S D 4** 137-T-1 の中央付近を東西流する溝で、幅75m、深さ25cmをはかり埋土は暗灰青色粘質土であった。ほぼ直線的な溝で、S B 4 とも関連するとみられる。出土遺物は土師器小皿、土錐などで、およそ13世紀前半に推定される。

**S D 5** S D 4 の北6.5mに所在する。幅80cm、深さ30cmの東西流する溝で、西側では浅くなつて、直角に曲って消失している。埋土は第1層が黒灰褐色粘質土、第2層が黒灰色粘土で、出土遺物は、須恵器壺身4点などで、およそ8世紀前半に推定される。

**S D 6** S D 5 の北2.1mに所在する。幅1.4m、深さ30cmの東西流する溝で、西側で浅くなり消失している。埋土は、第1層は暗灰灰青色粘土、第2層は黒灰色粘土であり、出土遺物は黒色土器碗、土師器皿などで13世紀前半とみられる。

**S D 7** 137-T-2 の南端で検出した落ち込みの性格を確認するため、南に拡張してトレンチを設定したところ、幅7.1m、深さ0.6mの東西流する大溝であることが判明した。層序は大きく2層に分かれ、第1層が暗灰青色粘土、第2層が黒灰色粘土であった。出土遺物は多く、黒色土器碗、土師器皿、羽釜、中世陶器、土錐などで、13世紀前半から14世紀前半に及ぶものである。

**S D 8** S D 7 の南で検出した。幅4.1m、深さ0.5mの溝で、東からL字に屈曲して南に向う。出土遺物は少なく、土師器皿1点と上層擾乱土より、染付1点が出土した。

#### (6) 小 結

今回の調査では、おおよそ3期にわたる遺構を検出することができた。I期の弥生時代後半の遺構は、S E 2、S E 4、S D 2など集落にかかわるものであるが、後世の削平・整地等により、住居跡そのものは検出できなかった。II期の奈良時代を前後する時期についても、S X 1、S D 1、S D 3、S D 5などで、建物跡等の検出はなかった。ただ136-T-3で検出した柱穴群は、まとまりはないが、方形の掘り方をもつものもあり、この時期にかかわるものか。III期の13世紀前半から14世紀にかけての遺構群は、今回検出した遺構の大半を占め、必ずしも、その全様は明らかでないが、集落を区画する溝（濠）の存在が推定されるほか、建物跡と井戸跡が、一つのセットとして確認できるなど、中世前半の集落の様相を示すものとして注目されよう。

（大橋信弥）

### 3. 出土遺物

#### (1) 出土土器

今回の調査でも、前回と同様各遺構より、弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、黒色土器などが出土し、コンテナ30箱を数えた。その概要は、前章でふれたのでここでは、SE4の一括遺物について、若干の検討を加えておきたい。

SE4 SE4からは、後期弥生土器が一括出土している。器種としては、壺、甕、高壺などで総数18点を数える。

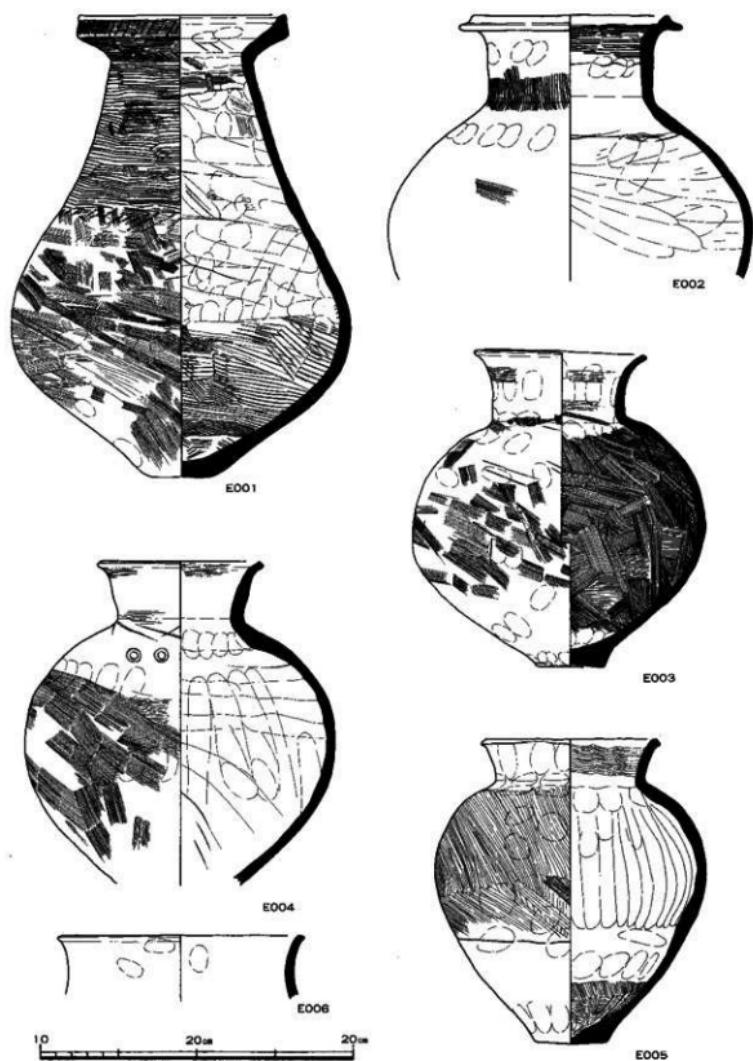
〔壺〕 壺にはA～Dの4種がある。壺A（E001）としたのは、「受口状口縁」で、胴部下半のふくらむもので、上半を粗いハケ目で、下半及び内面を細かいハケ目で調整する。口縁部及び肩部に、斜刺突列点文をめぐらし、装飾するものである。壺B（E002）としたのは、やや外反する直口縁に、大きく円弧を描く体部をもつもので、全体にハケ目調整したあと、丁寧にナデで消している。壺C（E003・E004）としたのは、円形に近いプロポーションをもつもので、口縁は、直口せず大きく外湾している。ハケ目調整後ナデにより丁寧に仕上げている。壺D（E005）としたのは、体部上半に最大径をもち、やや幅のすぼまるもので、口縁部は、「く」字に大きく外反している。全体に細かいハケ目で調整している。壺E（E007・E008）・F（E009）としたのは、いずれも小型品で、Eが「く」字に外反する口縁をもつもの、Fが直口気味の口縁をもつものである。

これらのうち、壺B・Cとしたのは、唐古45号墳出土のものに、それぞれ類例があり、弥生後期後半に位置づけられよう。

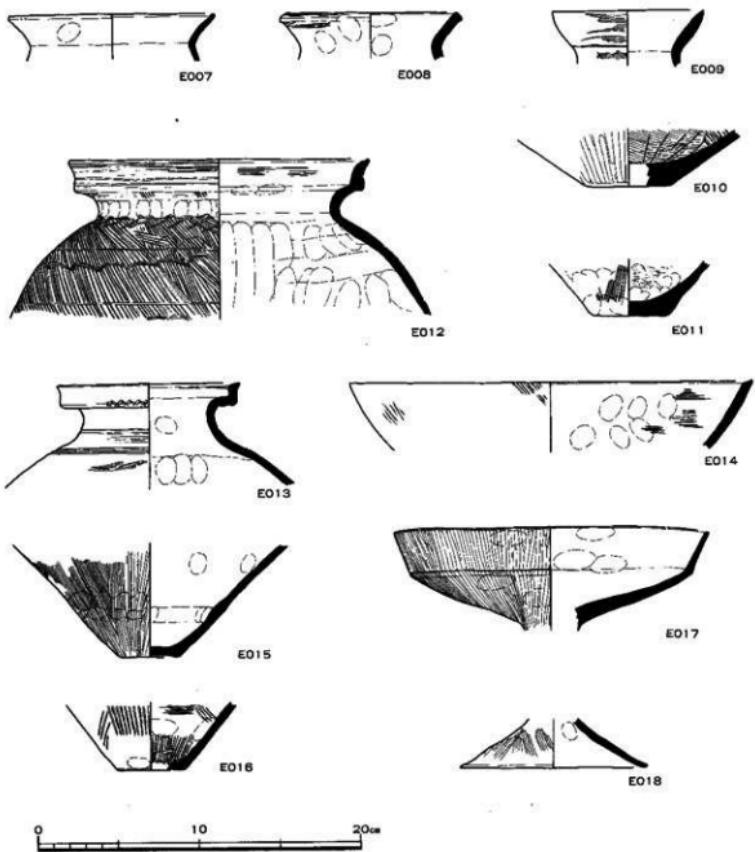
〔甕〕 甕は、すべて「受口状口縁」を有するもので、プロポーションのちがいによってA-I、A-IIに細分される。A-I（E012）は、この種のものとしては、通有なもので、口縁の径と、体部の最大径が一致し、口縁、体部上半に豊かな装飾を施したものである。A-II（E013）は、体部の最大径が、大きく張り、口縁部より大きいもので、装飾は、やや貧弱である。

ところで、受口状口縁甕の系譜や変遷については、近年になって、資料が急増し、その実態が明らかにされつつある。すなわち、從来、資料的な不足もあって、東海地方に広がる「S字状口縁」甕の系譜の中で理解されてきたこの種の土器が、「受口状口縁」甕として、近江に個有の土器と認識され、さらに「S字状口縁」甕の源流として、弥生中期に遡及して系譜がたどられているのである。そして、それとともに「飾られた土器」として、その歴史的な意味も注目されているのである。ここでは、若干の問題点について摘記するにとどめたい。

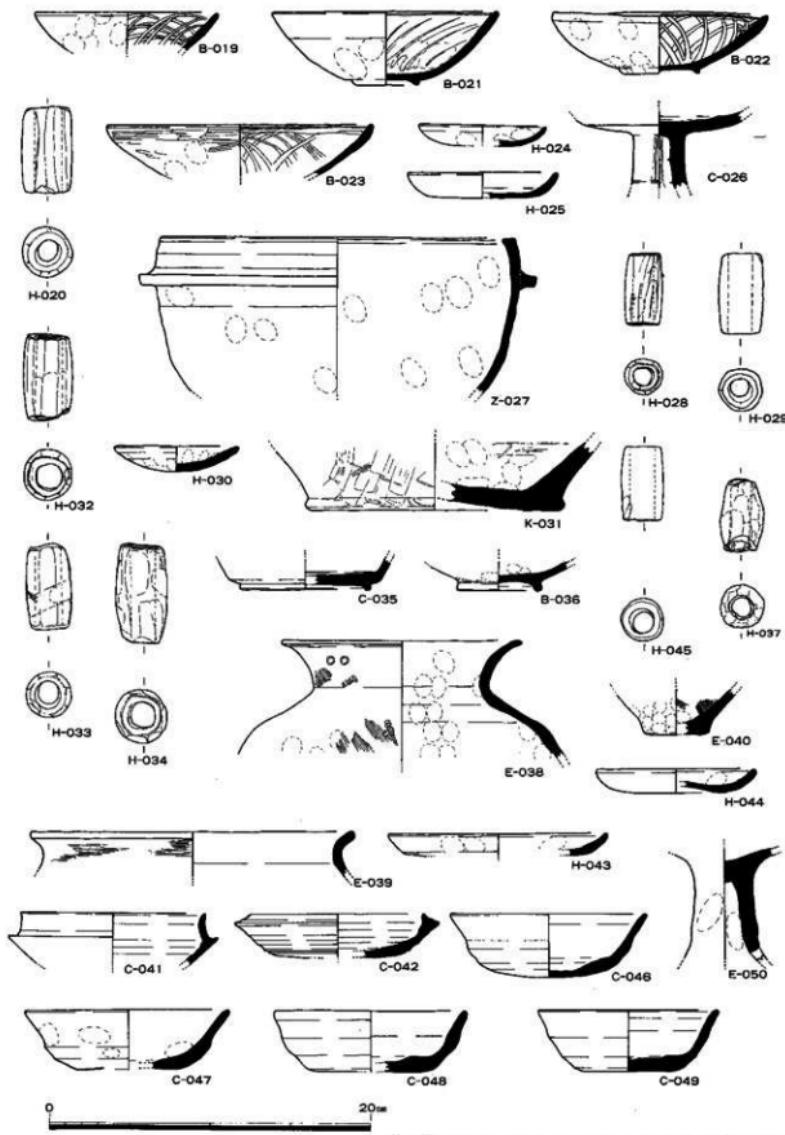
まず、これも資料增多とも関連する点であるが、近江在地の土器である「受口状口縁」甕にも、地域的な様相のちがいが、認められることである。すなわち、弥生中期末まで、ほぼ同じ変遷をたどったと考えられるこの種の甕は、後期から古墳前期にかけて、かなり顕著な地域相を、近江一国内でもみせてくるのである。詳細は別に譲らねばならないが、野洲郡・栗太郡を中心とする湖南・湖東地方にあっては、この種の甕の典型とされる口縁部・体部上半に列点文・櫛描直線文・円弧文・凸帯・刻目などを大量に施した「かざられた」甕が盛行するのに対し、大津地域から高島にかけての湖西地域にあたっては、「飾られた」甕は、確かに存在するが、湖南地域のものに比して、やや簡素なもので、庄内式並行段階では、装飾が、かなり後退しているのである。一方、湖北地域においても、「受口状口縁」甕は、口縁部周辺に列点文・直線文を施すだけの簡素なもので、野洲地域にみられた円弧文や凸帯をめぐらせたものなどは、生み出すことはなかったのである。これは、言うまでもなく隣接地域との交流



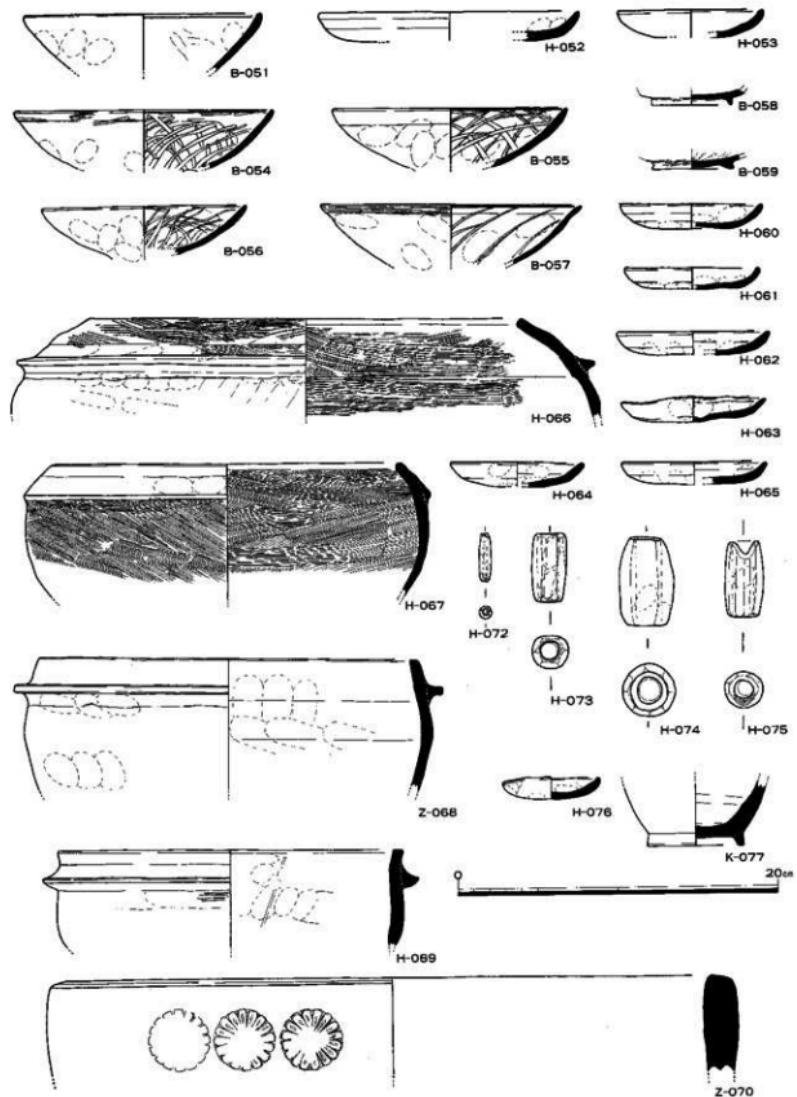
第8図 SE4出土土器実測図(1)



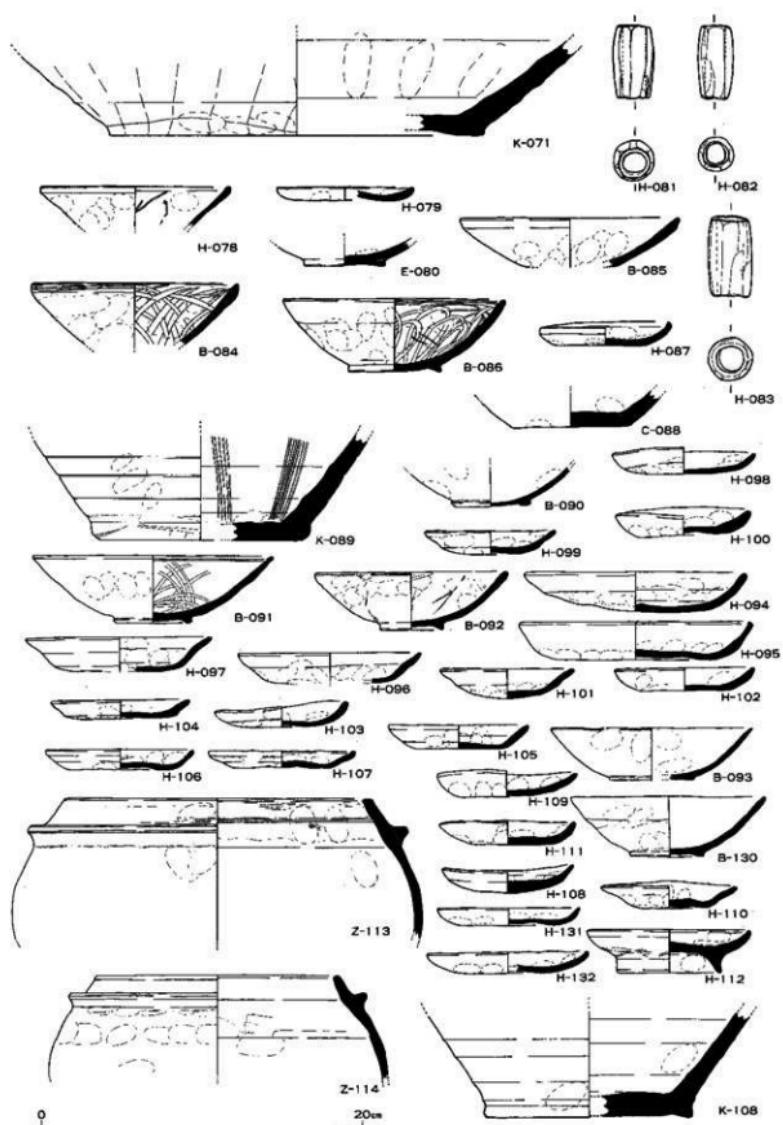
第9図 SE4出土土器実測図(2)



第10図 SE3, SE5, SEB, SX1, SK1, SD1~SD5出土土器実測図  
 19.20 (SE3) 21~29 (SE5) 30~32 (SEB) 33 (SX1)  
 34 (SK1) 35~37 (SD1) 38.40 (SD2) 41.42 (SD3)  
 43~45 (SD4) 46~50 (SD5)



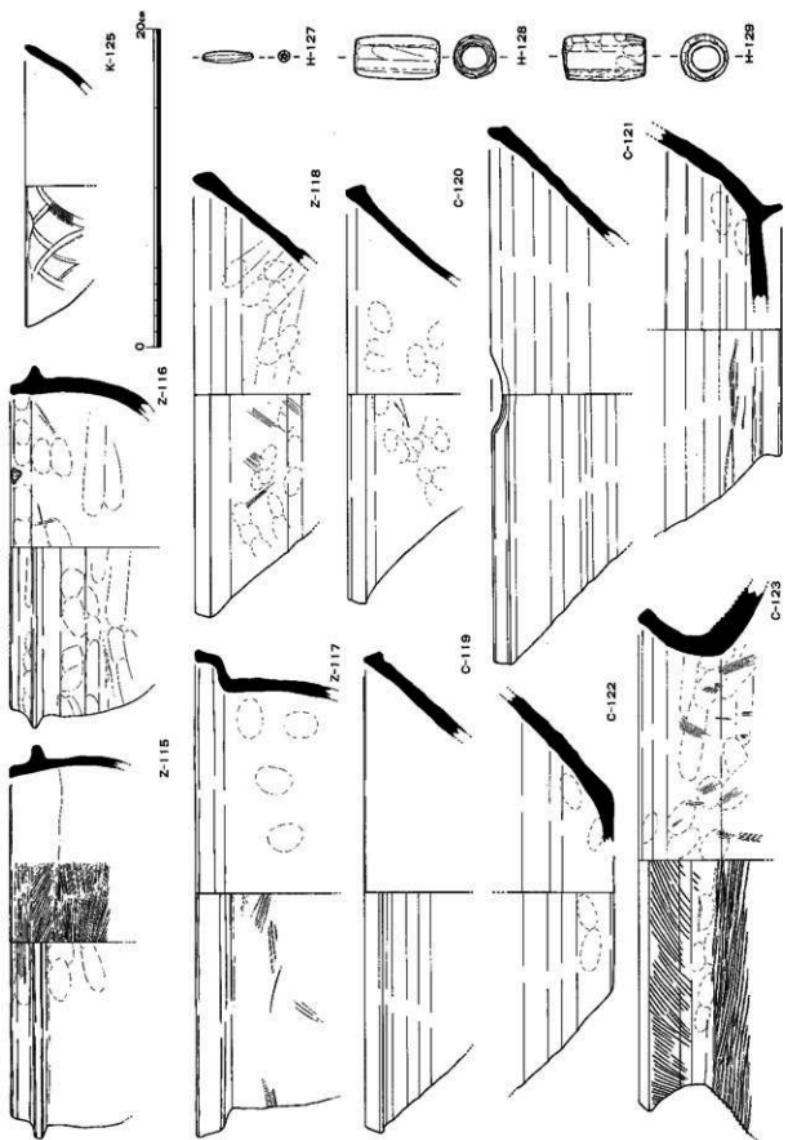
第11図 SD6～SD8出土土器実測図  
51～53 (SD6) 54～70, 72～75 (SD7) 76, 77 (SD8)



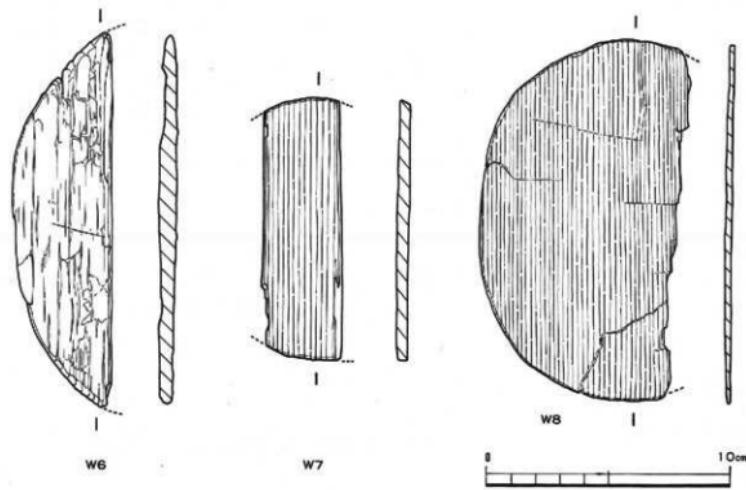
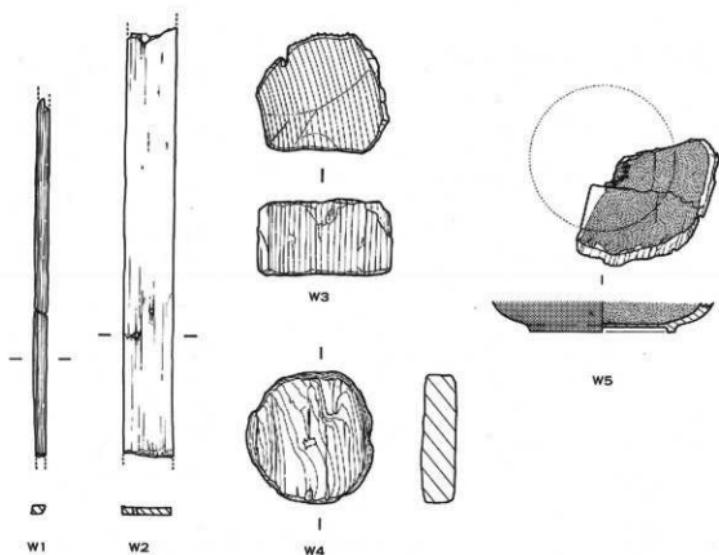
第12図 SD7. SB3～SB5. 137-T-2柱穴内包含層出土土器実測図

71 (SD7) 78.79 (SB3) 80～83 (SB4) 84.85 (SB5) 86～88 (137-T-2柱穴内)

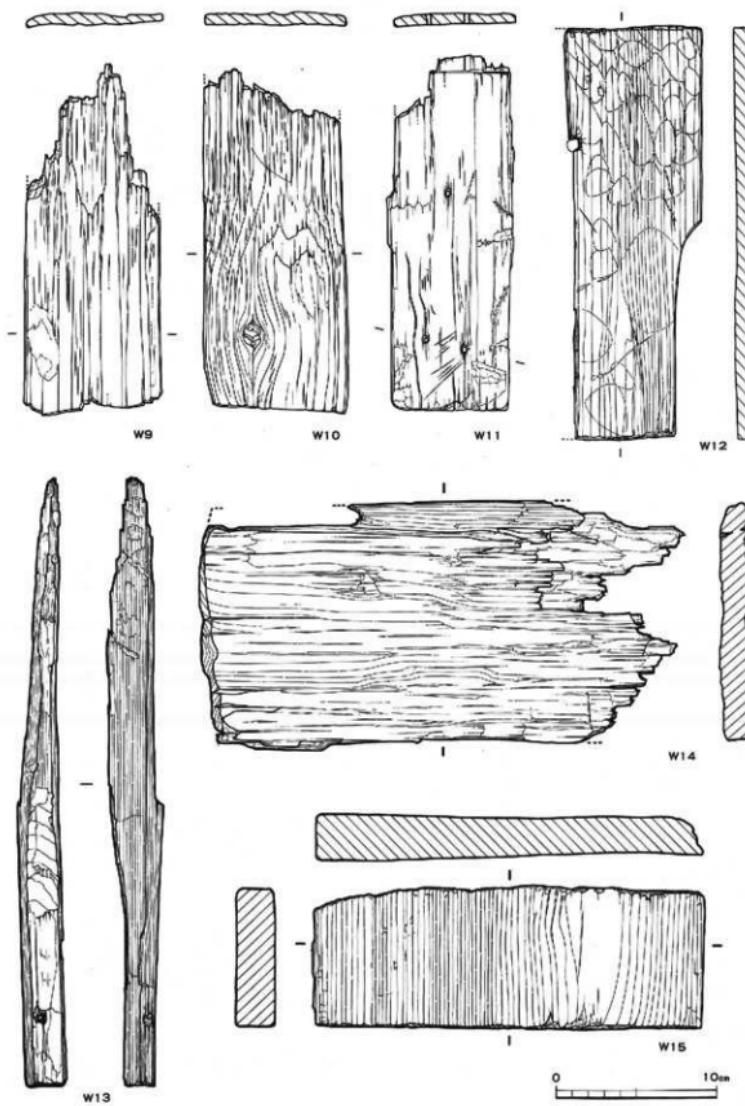
89 (137-T-2包含層) 90 (137-T-2包含層第1層) 91.92.94～114.126 (137-T-2包含層第2層)  
93.130～132 (137-T-2包含層第4層)



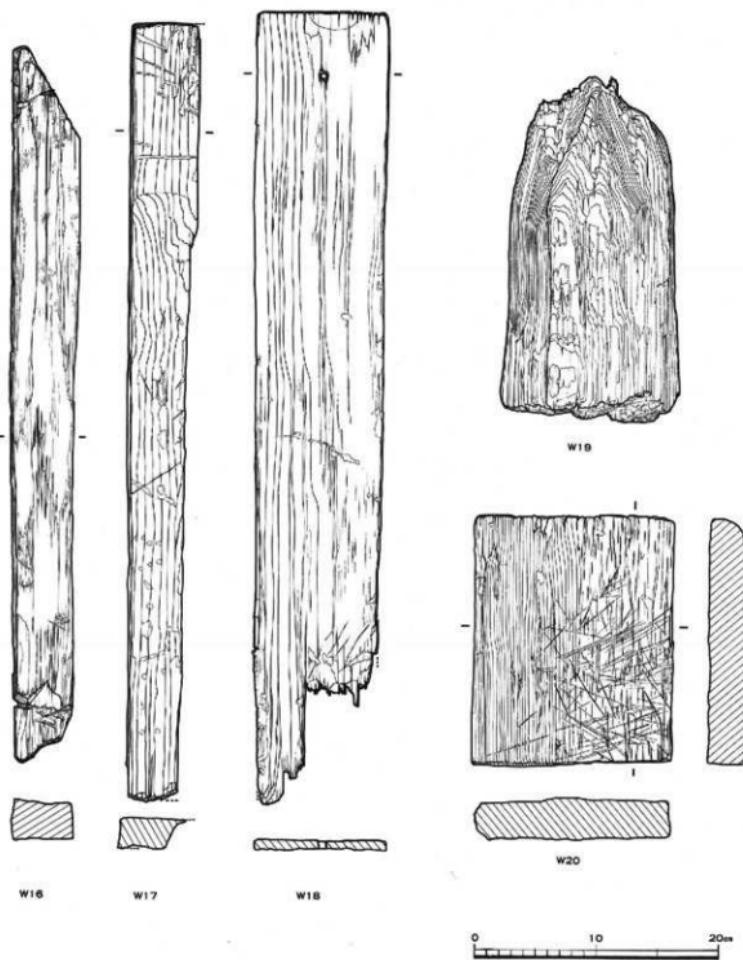
第137-T-2号坑出土土器素描圖 115~125, 127~129 (137-T-2号坑第2层)



第14図 出土木製品実測図 (W1~W8)



第15図 出土木製品実測図 (W9~W15)



第16図 出土木製品実測図 (W16~W20)

の消長を示すものであって、湖西地域には、畿内の影響が、湖北地域にあっては、東海・北陸地方の影響が顕著に認められるのである。そして、他地域との交流が相対的に低かった湖東・湖南においては、受口状口縁壺が、典型的に発展したと言えるであろう。そして、それが、両地域へも、強い影響を及ぼされたとみられるのである。

以上の点と関連して、注意されるのが、「受口状口縁」壺の、他地域への波及の問題である。東海地方を中心に分布するS字状口縁壺との関連については、近年、詳細な検討がなされ、従来とは逆に、それが受口状口縁の影響下に成立したことが指摘されており、一方、この種の土器が、主として弥生後期、淀川西岸地域および大和・河内に分布することも早くから指摘されているが、その実態は、今少し明確ではなかった。ところが、近年調査された、高槻市安満遺跡においてこの種の壺の大量出土があり、多くの点が明らかになった。すなわち、安満遺跡では、弥生後期前に、近江型の壺が、急速に受容されたのであるが、その後もかかる壺を作りつけたらしく、独自な形態のものも作り出しているのである。このことは、近江型の壺が出土するとしても、それをただちに近江の資料と対比するのは、やや問題のあることを示していると思われる。近江からの搬出の時期、近江のどの地域からの搬出品か、或は、搬入された地域での変化、展開等について検討が必要になると思われる。

ところで、本遺跡例については、いづれも湖南地方に通有な飾られた壺であり、湖南における地域的な展開の中で検討すべきであろう。しかし、現在のところ、かかる検討は十分になされているとは言えず、守山市服部遺跡の諸資料に対比するなら、A-I、A-IIとも、弥生後期後半に埋没したと考えられる環濠からも、同様な出土傾向を示す。ところが、弥生中期終末から後期前に比定される円形竪穴住居跡やS D20からは、類品の出土はみられない。したがって、後期後半という年代観が、一応考えられよう。

〔高坏〕 高坏は、坏部と脚部の破片が出上しているが、坏部口縁の外反がほとんど認められず、中河内の資料では、西ノ辻D地点のものに対比できる。弥生後期前葉とみて差しつかないと思われる。

以上、概略を述べたように、SE 4出土遺物は、おおよそ弥生後期、なかでも後半に比定された。志那中遺跡では、前年度の調査でも8基にのぼる井戸が検出され、弥生中期後半から鎌倉時代に至る良好な資料が得られたが、今回の資料は、それらを補うとともに湖南地域の弥生後期を検討する上で、貴重な資料と言えよう。

(大橋美和子)

## (2) 出土木製品

各選択より比較的豊富な出土をみたが、以下観察表にて、簡単に説明を加えたい。

(谷口 徹)

種類	図版番号	特徴	微 etc.	出土トレンチ	出土遺構
小形棒状品	W1	両端を欠損した残存長14.5cmを有する小形の棒状品である。断面は、ややくすれた四角形なす。スギの辺材を大きく削り落として作成したものであり、小枝を削り込んだものではない。用途は不明である。		137-T-2	SE 5
小形有孔板状品	W2	残存長17.5cm、幅2.0cmを有する小形の板状品であり、一側辺にややかたよつて孔が確認される。孔には木釘が打ち込まれていたものと思われ、小形の曲物あるいは曲物の周囲に施され、これを縛め固める用途をもつたタガとして利用に供されていたと考えられる。		137-T-2	SE 5
不定円板状品	W3 W4	W3は直徑2.5cm余、W4は2.6cm余の不定形な円形をなし、厚さはW3が3.2cm、W4が1.4cmを計る。両者ともスギの辺材を輪切りにして丸く仕上げたものである。W3では、上面に大きな削痕が確認される。蓋ないしはそれに類する用途に供されていたのであろうか。		137-T-2 137-T-2 南竜張区	SE 8 SD 7
漆塗り花弁文付椀	W5	断面逆台形の比較的安定した高台を削り出した木製の椀である。外面とも黒漆を塗り、内面のみ新たに塗り加えている。欠損が著しく全容は明らかでないが、内面底部中央に墨縁による花弁文が一例描かれている。漆塗り及びクロロの相当高度な技術体系を獲得するに至っていたものと思われる。高台の直徑6.0cmを計る。材質はケヤキであろう。材質はケヤキであろう。		137-T-2 南竜張区	SD 8 (II)
曲物底	W6 W7 W8	いずれも欠損しており全容の明らかな例は存在しないが、復元した直徑は、W6が20.4cm、W7が10.8cm、W8が14.8cmを計る。厚さは、W6が0.6cm、W7が0.5cmと比較的厚いのに対し、W8は0.3cmと薄い点が留意され、機能用途に応じた相異であるうと思われる。		137-T-2 137-T-2 南竜張区 137-T-2 南竜張区	SE 3 SD 8 (II) SD 8 (II)
板状品	W9 W10	短辺の一端を遺存するが、全容は明らかでない。両者とも大きく縦に割裂しただけの製品であると思われ、裏面に手斧様工具ないし刀子様工具による加工の痕跡を認め難い。ただ、W9の場合、遺存する方の一端の開閉及び中央が、數次にわたり段状に抉り込まれていた。W9、W10ともにスギ材である。		137-T-2 137-T-2	SK 3 SK 3

種類	類別	圖版番号	特徴	寸法	微 徵	etc.	出土トレンチ	出土遺物
有孔板状品	W11	W11	W11は、長さ21.8cm、幅7.8cm、厚さ0.7cmを計り、3孔が確認される。3孔には規則性がみられない。接近する2孔間に斜めの縫割が若干存在する。短辺の一端は、1.0cmの段状の削り落としが認められる。	W11は、長さ21.8cm、幅7.8cm、厚さ0.7cmを計り、3孔が確認される。3孔には規則性がみられない。接近する2孔間に斜めの縫割が若干存在する。短辺の一端は、1.0cmの段状の削り落としが認められる。	137-T-2 135-T-1	SE 3 SE 2		
有孔棒状品	W12	W12	W12は、長さ25.3cm、幅8.5cm、厚さ0.9cmを計り、1孔が確認されるが、その箇所で、縫に大きく削り落としがある。対する長辺は、全長のほぼ半分が、刃先状に抉り込まれている。表面は、刀子様工具による削痕が明顯である。刃当り幅は通常1.5cm前後を計る。	W12は、長さ25.3cm、幅8.5cm、厚さ0.9cmを計り、1孔が確認されるが、その箇所で、縫に大きく削り落としがある。対する長辺は、全長のほぼ半分が、刃先状に抉り込まれている。表面は、刀子様工具による削痕が明顯である。刃当り幅は通常1.5cm前後を計る。	137-T-2 135-T-1	SE 3 SE 2		
有孔棒状品	W13	W13	全長38.9cm、最大幅2.7cmを計る。下半は、断続的に削り込んで不定形な四角形の断面をなし、方形の1孔を穿っている。上半は、縫を狭めると同時に厚くする傾向がみられるが、加工全体に荒く、加工途上の製品である。スギ材である。	W13は、全長30.2cm、幅14.9cm、厚さ1.9cmを計る。一端を欠損し、全体に擦耗が著しい。	137-T-2 137-T-2 南北張区 137-T-2	SK 3 SD 8 (II) P 11		
板状品	W14	W14	W14は、長さ30.2cm、幅14.9cm、厚さ1.9cmを計る。一端を欠損し、全体に擦耗が著しい。	W14は、長さ30.2cm、幅14.9cm、厚さ1.9cmを計る。一端を欠損し、全体に擦耗が著しい。	137-T-2 137-T-2 南北張区 137-T-2	SK 3 SD 8 (II) P 11		
	W15	W15	W15は、長さ8.7cm、幅24.3cm、厚さ2.4cmを、又W20は長さ20.3cm、幅16.1cm、厚さ3.1cmをそれぞれ計る。W20は、縫機に走る直線的な削痕が著しい。木製品等の製作台として利用される過程で、鉄製工具による打圧に起因する縫割であるかもしれない。W20は、最終的に生穴の縫板に供されたいた。	W15は、長さ8.7cm、幅24.3cm、厚さ2.4cmを、又W20は長さ20.3cm、幅16.1cm、厚さ3.1cmをそれぞれ計る。W20は、縫機に走る直線的な削痕が著しい。木製品等の製作台として利用される過程で、鉄製工具による打圧に起因する縫割であるかもしれない。W20は、最終的に生穴の縫板に供されたいた。	137-T-2 137-T-2 南北張区 137-T-2	SK 3 SD 8 (II) P 11		
	W20	W20						
大形板状品	W16	W16	W16は、長さ58.2cm、幅5.1cm、厚さ3.5cmを計る。両端を斜めに大きく削り落とし、端部近くには両側からの切り欠きが認められる。切り欠きの箇所で他の木材を組み合わせて接觸したのであろうか。井戸跡からの出土例であり、井側を固定する機の可能性が高い。	W16は、長さ58.2cm、幅5.1cm、厚さ3.5cmを計る。両端を斜めに大きく削り落とし、端部近くには両側からの切り欠きが認められる。切り欠きの箇所で他の木材を組み合わせて接觸したのであろうか。井戸跡からの出土例であり、井側を固定する機の可能性が高い。	135-T-1 135-T-1	SE 2 SE 2		
	W17	W17	W17は、長さ64.1cm、現存幅5.4cm、厚さ2.6cmを計る。一部手斧様工具による削痕が確認される。	W17は、長さ64.1cm、現存幅5.4cm、厚さ2.6cmを計る。一部手斧様工具による削痕が確認される。	135-T-1 135-T-1	SE 2 SE 2		
大形有孔板状品	W18	W18	現存長60.5cm、幅10.8cm、厚さ0.8cmを計る。一端を欠損しており金具は不明であるが、遺存する側の端部近くに円孔が1つ穿かれている。	現存長60.5cm、幅10.8cm、厚さ0.8cmを計る。一端を欠損しており金具は不明であるが、遺存する側の端部近くに円孔が1つ穿かれている。	137-T-2	SE 3		
柱根	W19	W19	現存長28.6cm、復元の直径25.0cm前後を計る。摩耗が著しく、全体の3分の2近くを欠損しているが、本来は丸太を荒く削り込んだ製品であったと思われる。	現存長28.6cm、復元の直径25.0cm前後を計る。摩耗が著しく、全体の3分の2近くを欠損しているが、本来は丸太を荒く削り込んだ製品であったと思われる。	137-T-2	P 68		

#### 4. おわりに

今回の調査も、支線排水路を中心とする限られたものであったが、昨年に引きつづき、志那中遺跡の範囲が南に広がることが明らかになったほか、その中心部が、現集落の西よりに重複して存在することが、より明確になった。そして、弥生時代から中世にかけての集落変遷の一端が、前回に引きつづき明らかになり、草津市域における拠点集落として、重要な位置を占めることが明らかになった。

特に、集落の盛期が、この地点では13世紀から14世紀代にあること、土錐の大量出土などから、漁村的性格の濃いことなども指摘され、今後の調査、研究の進展によって、さらに具体的な様相が明らかになるとみられる。

(大橋信弥)

## 第2章 守山市正樂寺遺跡

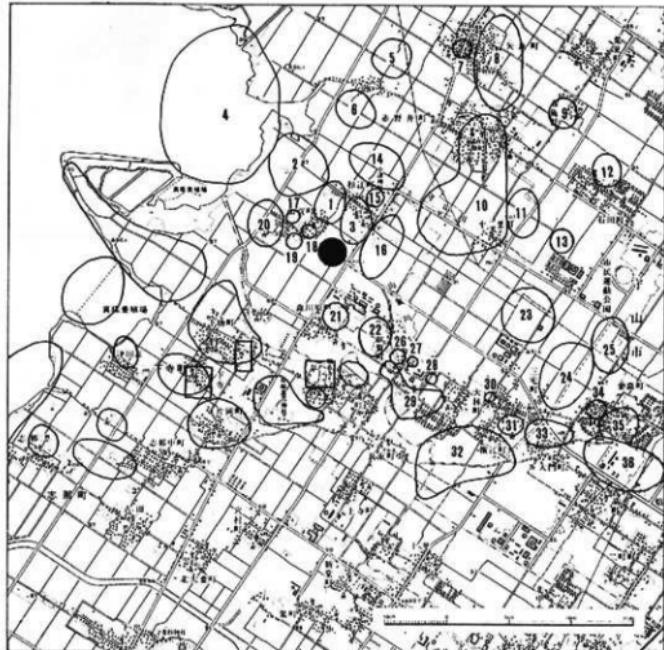
## 1. はじめに

本調査は、53年度県営ほ場整備事業に先立ち、実施したもので、昭和53年12月1日から12月15日までを要して実施した。本遺跡は県道大津一近江八幡線(浜街道)の琵琶湖側に隣接し、山賀町の南に位置、2/1,000~2.5/1,000の勾配で1km先の琵琶湖へと続く野洲川最下流域に広がる三角洲上に所在する。

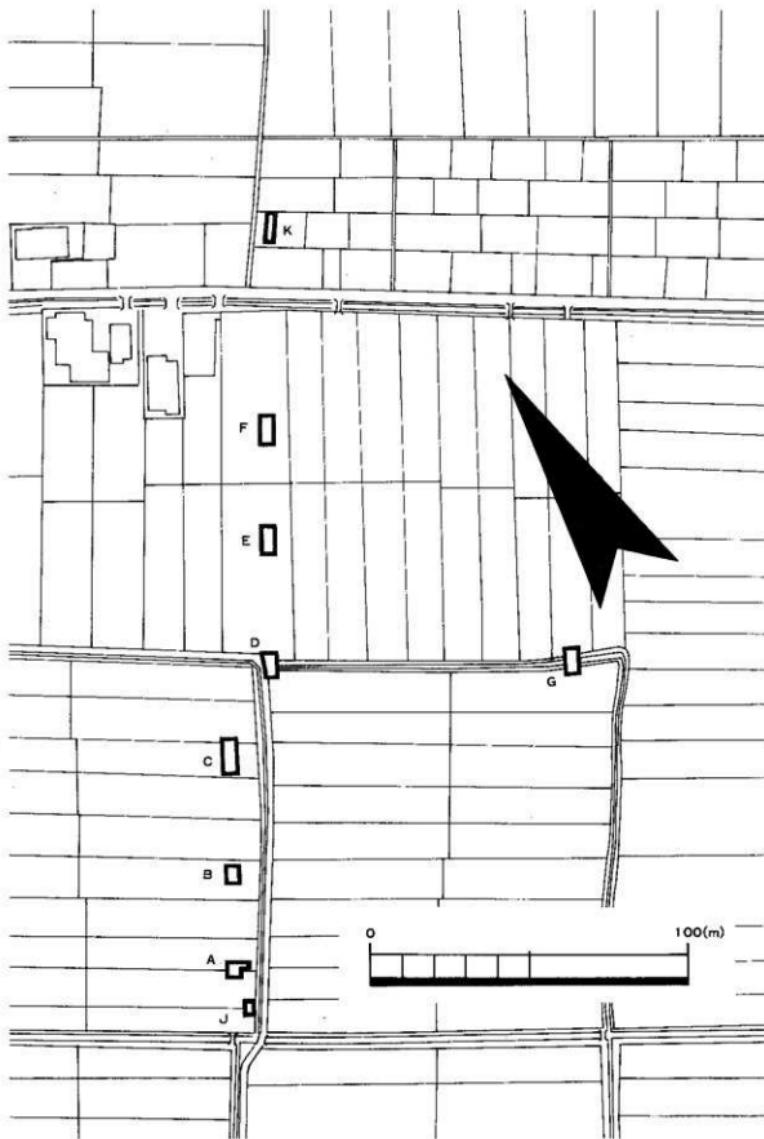
旧野洲川南流とされる境川を南にし、半径500m付近には東に杉江遺跡、北に山賀西遺跡、南に森川原遺跡、1.5km内外には、赤野井遺跡、欲賀寺跡、花摘寺遺跡と多くの集落跡、寺院跡が知られる。

本遺跡については、これまで明確な考古資料、古文書等は発見されておらず、時期、規模、位置なども全く不明であり、土地の古者の伝承のみが残っていた。ただ53年度春の事業地に於て採取された、土器、瓦片は付近の歴史の片鱗をのぞかせたが、遺構としてのまとまりが無く、遺跡の性格は依然として不明であった。

なお現地調査および整理報告については、本課技師大橋信弥、守山市教育委員会社会教育課主事山崎秀二が担当し、平井寿一氏の協力を得て実施した。ほかに井入勉、三宅治の諸君が参加した。（大橋信弥、平井寿一）



第1図 位 置 図



第2図 トレンチ設定図

## 2. 調査経過

当初の予定では40号支線水路予定地に沿い7ヶ所、37号支線水路予定地上に3ヶ所、その中にあたり、付近の地割から条里溝を残すと思われる排水溝をまたいで1ヶ所の計11ヶ所のトレンチを予定していたが、重機によらずすべての手掘りの調査となつたためA～G、Kの8ヶ所に削減した。そして調査開始後Aトレンチ近くの25号支線道路敷設の工事による深掘り断面より溝を確認し、予想される延長上にJトレンチを新たに設定した。

(平井寿一)

## 3. 検出遺構

各トレンチの壁断面に見られる暗灰紫色粘質土をI層、黒灰色粘土をII層とした。それぞれは色調、明暗、厚さ等変化はあるが、層序的に見て、ある一時期の遺構面として共通するものと思われる。このI層上の黄灰色粘質土(床上)に包含されていた土器片は、陶器、染付などの磁器等、中世～近世のものが多く、II層上からはほとんど遺物の出土を見なかつた。

### (1) 1次遺構面

#### J-1トレンチ

S D-1は現排水溝とほぼ重複し深さ約70cm、幅約250cmを測る。I層より掘り込んでおり、ほぼ完形の天目茶碗が②層より出土したことから中世の条里溝と思われ、付近の地割にも一致する。杭そのものは発見されなかつたが、⑧層東岸の立ち上がり断面上に杭の抜き跡らしき細い柱状の落込みが見られた。

北隅で検出されたS X-2はI層を切り、深さ約30cmで北東にのびAトレンチのS X-1へと続く、不整形な浅い溝状の遺構である。

#### A-1トレンチ

Jトレンチより続くS X-1は深さ30cm、幅2.5～3mを測り、西側より中心部へ凸状に暗灰紫色粘土がのびてゐるが二分するものでもない。

#### B-1トレンチ

I層遺構面上において鉄による耕作跡と思われる直径10cm前後の明灰色上の斑文列及びそれらが連続し溝状を程した遺構を検出したが、深さが1～3cmと非常に浅く検出確認の過程でほとんど消滅した。南東から北西に平行に連なり現排水溝に直行する。

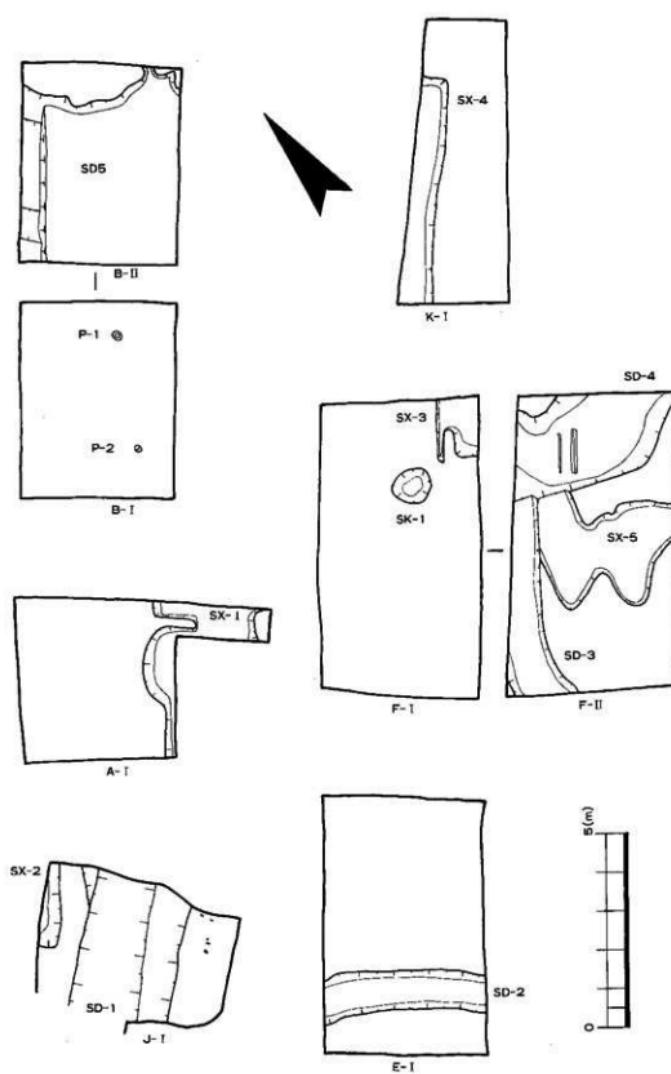
明灰色粘質土のピット2個は明確に検出され、P-1は掘り方25cm×30cm柱穴の径8cm、深さ37.5cmを測り、P-2は18cm×15cm柱穴の径9cm、深さ22.3cmを測る。これらはN-30°-Eの方向に2.92mの間隔で並ぶが、建物跡としての確証はない。

#### E-1トレンチ

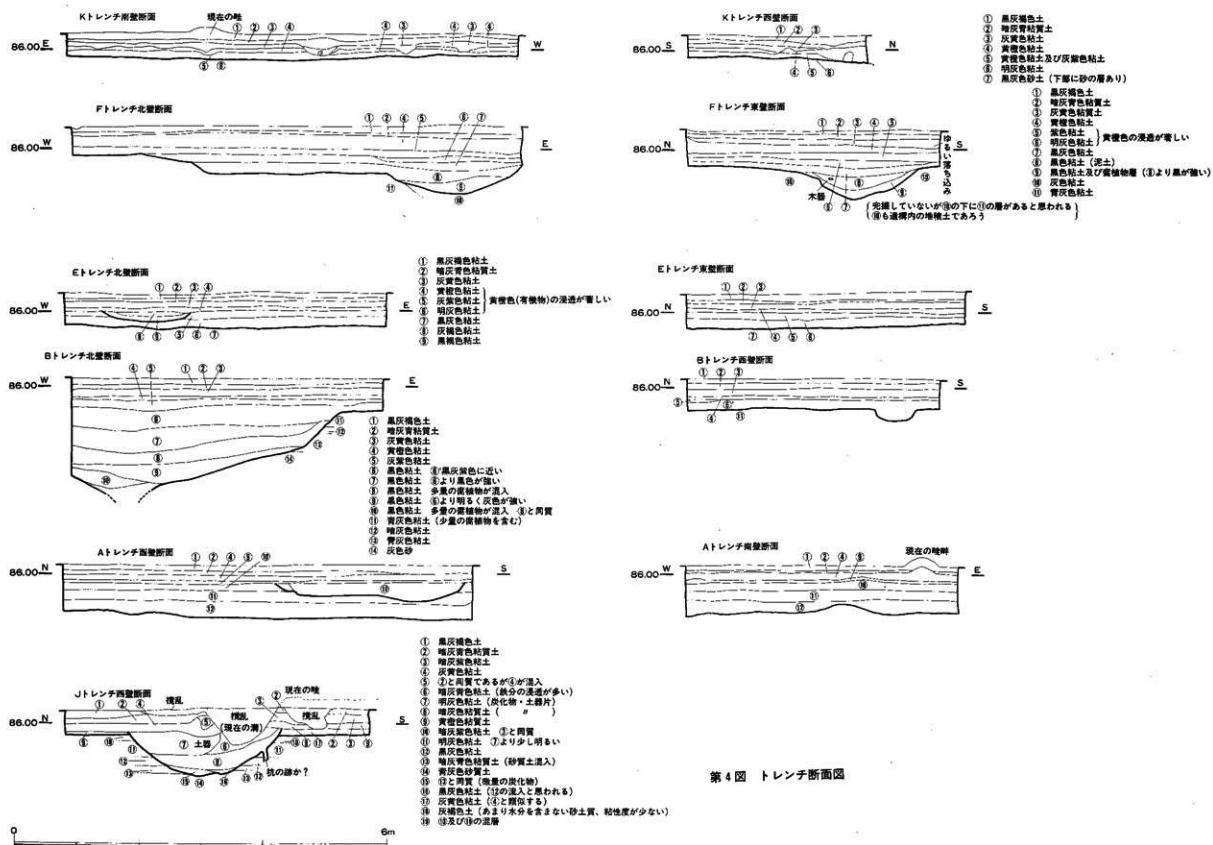
S D-2は幅約1m深さ15cm～17cmで条里の方向と一致するが、やや南へ溝曲している。I層を切る浅い溝で部分的な水田への用排水に利用された可能性もある。

#### F-1トレンチ

もとより不安定な土層で遺構検出も困難を極めたが、弱いながらも土質の変化が見られた。



第3図 各トレンチ造構実測図



S K - 1 は卵型で 100cm × 90cm、深さ 22cm を測る浅い土坑状のもので、S X - 3 は東方向へのゆるい落ち込みであろう。深い所でも 10cm 程であるが東へ広がると思われる。

#### K - 1 トレンチ

使用中の現排水溝及びコンクリート壁のため S X - 4 の詳細はつかめなかった。深さ 20cm ではあるが現排水溝の方へ落ち込んでおり、又、北東の端部は明確でなく、条里の方向に一致するより深く広い溝状の遺構であった可能性がある。

#### (2) 2 次遺構面

#### B - II トレンチ

II 層の黒色粘土が深く落ち込む S D - 5 は断面確認の際の深掘りにより確認された。深さ 1.5m 以上、幅はおそらく 7m 以上の大溝になると思われ、中層より黒灰色腐植土で炭化前の草植物の堆積が相当量あり、水を溜めながら除々に埋った過程が見られる。

付近の等高線を見ると幅 250~300m、比高差 30cm のゆるい谷状地形が認められ、I 層、II 層においても同様に B トレンチを中心とした谷状を程しており、この S D - 5 は当時の野洲川の一主流を成す河川であった事を想像させる。

#### F - II トレンチ

東から北へ湾曲しながら流れる S D - 4 は幅 2.0m ~ 2.5m、深さ約 60m で黒灰色泥土の堆積層から木製品 2 点及び平安後期のものと思われる黒色土器の底部が出土した。S D - 5 と同じく、II 層の黒灰色粘土が上面を覆っており時期も同じ頃と思われる。S D - 4 の地山とした少量の腐植物を含む灰色粘土が深く広がる可能性があり、より大きな規模の溝が下層に予想される。

S X - 5 は不明確な落込みで深さ 7 ~ 8cm を測る不整形な溝状を呈す。

S D - 3 は S D - 4 の堆積過程の終り頃に流れ込んだと思われ、⑧層と共通である。幅 1.25m、深さ 30cm で、S D - 4 に直行する南北流である。

(平井寿一)

## 4. 出土遺物

出土した遺物は、きわめて少なく、大部分が耕土中に含まれていた近世陶器で、ここでは須恵器、黒色土器、土師器等を中心に紹介しておきたい。

〔須恵器〕(C001・C002) 壺・壺の破片が若干出土している。いづれも少破片で、器形等の復元は不可能であるが、奈良時代～平安時代のものであろう。

〔黒色土器〕(B003～B007) いずれも碗で、B類の内黒土器である。体部は直線的或はゆるやかに内湾しており、久野部遺跡例などを参照するなら、おおよそ平安時代後期に比定しうるであろう。

〔土師器〕(H008) 図示し得たのは、鉢 1 点である。中世後期に通有なほうらく状のものか。

〔瓦質土器〕(Z009) 瓦質で厚手の土器も若干出土している。器形は不明。

〔天日〕(K010) 小ぶりの天日茶碗 1 点が出土している。潮戸ないし美濃の製品であろうが、直線的に立ちあがる口縁などからみて、江戸時代に下る可能性もある。

〔信楽〕(K011～K015) 信楽と考えられる陶器が若干出土している。壺、壺、摺鉢などで、大部分が近世のものと思われる。

〔国産陶磁器類〕(K016～K023) 軸をかけた、国産の陶磁器がかなり出土している。大部分が碗で、茶碗と

して使用されたものであろう。

〔土鍤〕(H024・H025) 土師質の土鍤が2点出土している。琵琶湖にも近いところであり、魚網に使用されたものであろう。

〔瓦〕 丸瓦が若干出土している。近世のもので、ごく普通のものである。

〔石製品〕 石鍋の破片と考えられるものが出土しているが、ゆるやかに内湾する体部をもち、口縁その他は破損しており全形は明らかでない。一応石鍋と解される。

〔鉄製品〕 用途不明の鉄塊が1点出土している。

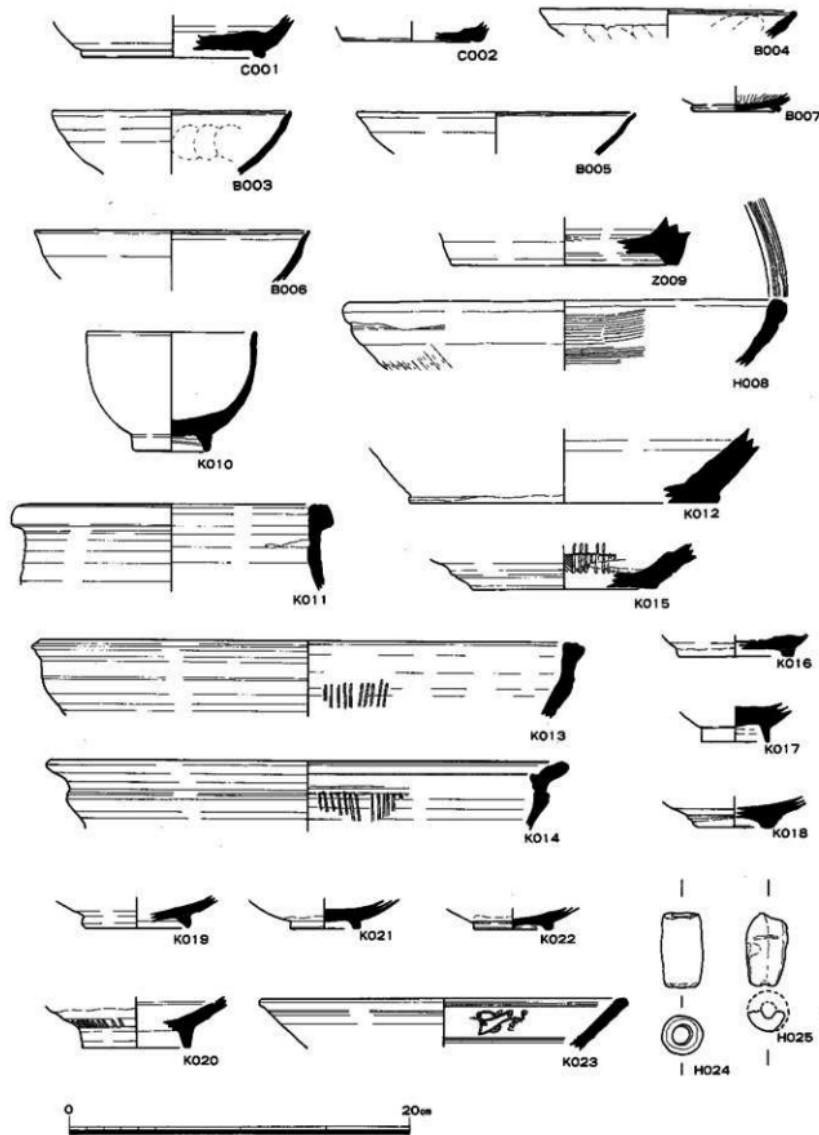
(平井寿一)

## 5. おわりに

野洲川最下流域は湿田が多く、琵琶湖に近い山賀付近にも水田耕作の苦労を物語る竹製の暗渠排水施設が縱横に設置され、それは地表下50cmにも達する。土地の人々から一世代前の明治から昭和初期にかけてのものと聞いた。竹の節をくり抜き葦で巻いたものを埋設する簡素なものだが現在でも十分に機能を果しており、かなりの量の水がトレンチ内に逆流し我々の作業の大きな障壁となった。特に排水溝をまたいで設定したD・Gトレンチでは6～8本も集中し遺構面からの滲出水が遺構確認を不可能なものにし、又、各トレンチに於いても強粘性粘土が作業の進行を阻んだ。結果的に、CトレンチではI層に於いて遺構が検出されず、Dトレンチに於いても明確なものは無く、Gトレンチは滲出水がひどく放棄した。

各トレンチ内で出土した遺物は、遺構内からのものが少なく後に流入した可能性もあり時期決定が非常に難しい。今回の主目的である正楽寺跡については全く成果があげられなかつたが、今後の調査のための布石として判断を待ちたい。

(平井寿一)



第5図 出土遺物実測図

器種	器形	図版番号	法 量	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	色調・胎土・焼成	出 土 地 点
須 恵 器	壺	C001	底 径 10.6	○断面逆台形の低い高台で、端面は外端で着地する。	○貼り付け後ナデを施す。 ○体部内外面共ロクロナデ。	○色調 (内)青灰色 ○胎土 (外)淡青灰色 ○焼成 精 良 やや不良	F-1
	壺	C002	底 径 8.0	○あげ底の底部。	○底部外側へラ切り不調整。 ○底部内面、機ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 精 良 ○焼成 堅 織	Jトレンチ SD-1
	壺	B003	口 径 14.0	○体部は、ゆるやかに内溝してのびあがり、口縁部に至り、わずかに内反する。 ○口縁部内面に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ。 ○内外面共ナデ及び指押え。	○色調 淡灰青褐色 ○胎土 精 良 ○焼成 良 好	E-1
黒 色 土 器	壺	B004	口 径 15.0	○体部は、ほぼ直線的に外上方へのび、口縁部はさらに外反して、燐を丸く收める。	○粘土紐巻き上げ。 ○内外面共ナデ及び指押え。	○色調 灰黃褐色 ○胎土 精 良 ○焼成 良 好	E-1
	壺	B005	口 径 16.2	○体部は、ほぼ直線的に外上方へのび、口縁部は、わずかに外反して立ち上がりが、強い輪ナデによりやや凹状を呈している。 ○口縁部内面に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ。 ○内外面共ナデ及び指押え。	○色調 黄灰色 ○胎土 精 良 ○焼成 良 好	Dトレンチ-①
	壺	B006	口 径 16.0	○体部は、ゆるやかに内溝してのび、口縁部は、わずかに外反して端部を丸く收める。 ○口縁部内面に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ。 ○内外面共ナデ及び指押え。	○色調 (外)暗米褐色 (内)黑色 ○胎土 精 良 ○焼成 良 好	C-2

器種	器形	図版番号	法 量	形態の特徴	成形手法の特徴	色調・胎土・焼成	出土地点
黒色土器	木 梶	B007	底 径 5.0 高台高 0.4	○低い、断面逆三角形の高台で、や や外方へふんばる。	○内面に方射状の暗文を施す。 ○貼り付け高台で、貼り付け後ナデ。	○色調 (内) 黒色 ○胎土 良好 ○焼成 良好	C-2
土師器	H008	口 直 24.5		○体部は、やや内湾気味と斜上方に のび、端部を外方に曲折して肥厚 させる。 ○口縁部端面と3条の沈線を施す。	○口縁部及び体部上方端ナデ。 ○体部外面は、ヘラケズリ。 ○体部内面、細かいハケ調笠後模 デを施す。	○色調 淡灰褐色 ○胎土 良好 ○焼成 良好	J トレンチ SD-1
瓦質土器	Z009	底 径 13.2		○低く、安定した逆台形の高台。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○色調 黑色 ○胎土 良好 ○焼成 良好	F-1
天 目	K010	口 径 9.8 器 高 7.0 底 径 4.0 高台高 1.0		○体部は、ゆるやかに内湾してのび あがり、口縁部は、ほぼ直立して 立ち「上」がり端部を丸く收める。 ○高い高台で、断面逆台形を呈す。	○体部内外面共クロロナデを施す。 ○貼り付け高台で、貼り付け後ナデ。	○色調 茶褐色の地にア メ色の鉛釉 ○胎土 精良 ○焼成 堅致	J トレンチ SD-1中間層
信 金	K011	口 径 18.0		○体部は、やや外湾気味に立ち上がり、端部を外方に曲折して肥厚させ る。	○内外面共横ナデ。	○色調 明黄褐色 ○胎土 粗く灰バラを含 む ○焼成 堅致	D トレンチ
樂 すり鉢	K012	底 径 18.0		○安定した平底で、体部は屈曲して 直線的に外上方へ開く。	○内外面共指ナデ。 ○底部外面へラケズリ。	○色調 赤紫色 ○胎土 2~3mm大の石 粒合 ○焼成 堅致	J トレンチ SD-1

器種	器形	出版番号	法 量	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	色調・胎土・焼成	出土地点
信 り	K013 口 径 31.2			○直線的に開く体部で、口縁部は、横ナデによりやや屈曲をもつて外反し、端面をほぼ平坦に取める。 ○体部内面に、絞方向に11+α条の多數の芯線を施す。	○内外面共横ナデ。	○色調 黒茶褐色 ○胎土 砂粒含有 ○焼成 良好	Jトレンチ SD-1
	K014 口 径 29.9			○直線的に開く体部で、口縁部は、屈曲して外側気味にさらにはく。 また、体部と口縁部の接合の際、内面に突起した筋線を残している。 ○体部には、7条を一単位とする沈線を絞方向に施す。	○内外面共横ナデ。	○色調 喧紫色 ○胎土 石粒含有 ○焼成 堅焼	Dトレンチ 補助排水
楽 鉢	K015 底 径 10.7			○あげ底の底部で、やや丸味のある屈曲をもつて体部は直線的に斜上方にのびる。 ○内面に、沈線。	○内外面共横ナデ。 ○底部及び体部との境界へラケナリ。	○色調 赤茶褐色 ○胎土 粗く1mmの大砂粒含有 ○焼成 堅 緩	Gトレンチ-①
	K016 底 径 6.7 高台高 0.4			○低い高台で、断面逆台形を呈す。 ほぼ直線的に垂下する。	○貼り付け高台で、貼り付け後ナデ。 ○底部内外面に貼土紐巻き上げ底を残す。	○色調 灰白色 ○胎土 精良 ○焼成 堅 緩	K-1
国 産 陶 磁 器	K017 底 径 4.0 高台高 0.8			○高い高台で、断面逆三角形を呈し、ほぼ直線的に垂下する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。 ○内外面共ロクロナデ調整。	○色調 淡褐色の地色に 濃青緑色の釉 ○胎土 精良 ○焼成 堅 緩	Dトレンチ 補助排水
国 産 陶 磁 器	K018 底 径 4.3 高台高 0.7			○低く、断面逆台形を呈する高台でやや内反する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ及びナデを施す。 ○内面、横ナデ調整。 ○外面、ヘラケナリ。	○色調 茶褐色の地色に 灰白色の釉 ○胎土 精良 ○焼成 堅 緩	Dトレンチ 補助排水

器種	器形	図版番号	法量	形態の特徴	成形手法の特徴	色調・胎土・焼成	出土地点
国 產 陶 磁 國	K019	底 径 高台高 0.8	6.0	○断面逆三角形を呈し、やや外方に ふんばる。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。 ○内面クロナデ調整。 ○内面へラケズリ、高台と体部境界 付近には高台に向けて縦方向のヘ ラケズリを行なう。	○色調 灰白色の内面に 淡緑色の釉 ○胎土 精 良 ○焼成 やや軟	C-1
	K020	底 径 高台高 1.2	6.3	○高い高台で、断面逆台形を呈し、 やや内湾する。 ○底部内面と一条の沈線を残す。	○貼り付け高台、貼り付け後ヘラケ ズリ。 ○内面クロナデ調整。 ○内面へラケズリ、高台と体部境界 付近には、高台に向けて縦方向のヘ ラケズリを行なう。	○色調 灰白色の地色に 白地の性 ○胎土 精 良 ○焼成 堅 敵	B トレンチ-2
	K021	底 径 高台高 0.4	4.0	○やや低い高台で、断面逆台形を呈 する。	○ケズリ出し高台。 ○内面、横ナデ調整。 ○外面、高台付近ヘラケズリを行な う。	○色調 淡黄緑色の釉 ○胎土 精 良 ○焼成 堅 敵	D トレンチ-1
國	K022	底 径 高台高 0.4	4.4	○低い、新面逆台形の高台。	○ケズリ出し高台。 ○内外面共、ロクロロナデ調整。	○色調 灰白色の釉 ○胎土 精 良 ○焼成 やや軟	D トレンチ 捕助排水
	K023	口 径 21.3		○体部は、ほぼ直線的にのび端部を 平担に收める。 ○内面に沈線又及び撫刻文。	○内外面共ロクロナデ。	○色調 茶褐色の釉 ○胎土 精 良 ○焼成 堅 敵	F-1
	H024 H025	直 径 4.2~4.4	2.2~2.4	○円柱状を呈し、やや中ぶくれで、 直徑0.9~1.2cmの円孔を穿つ。	○手づくね。	○色調 茶褐色 ○胎土 良 好 ○焼成 良 好	H024 C-1 C025 B トレンチ-2
土 製 品	土 鍋						(大橋美和子)

# 図 版

図版一 志那中遺跡



調査前景（北より）



調査前景（東より）

図版二 志那中遺跡



KT-2全景（南より）



136-T-1沼沢地東壁断面（西より）

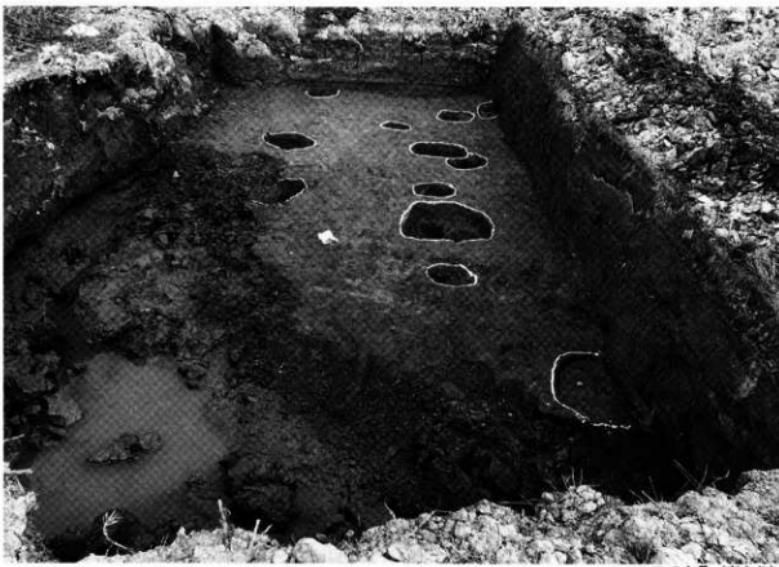
図版三 志那中遺跡



135-T-1全景（北より）



135-T-1全景（南より）



図版五 志那中遺跡



136-T-1全景 (南より)



136-T-1全景 (北より)



図版七 志那中遺跡



137-T-2全景（南より）



SB4近景（北より）

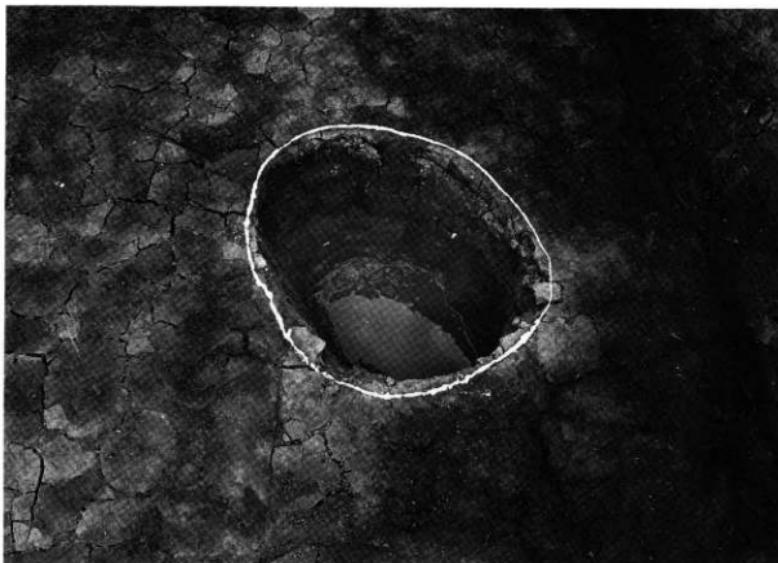
図版八 志那中遺跡



SD5, SD6近景（北より）



SE5, SB7～SB9近景（南より）



SE2近景（北より）



SE3遺物出土状況（南より）



SE3近景（南より）



SE4近景（南より）



SE6近景（南より）



SE9検出状況（北より）



SK1近景（東より）



SD1, SD2近景（西より）



表板検出状況（西より）



表板検出状況（北より）

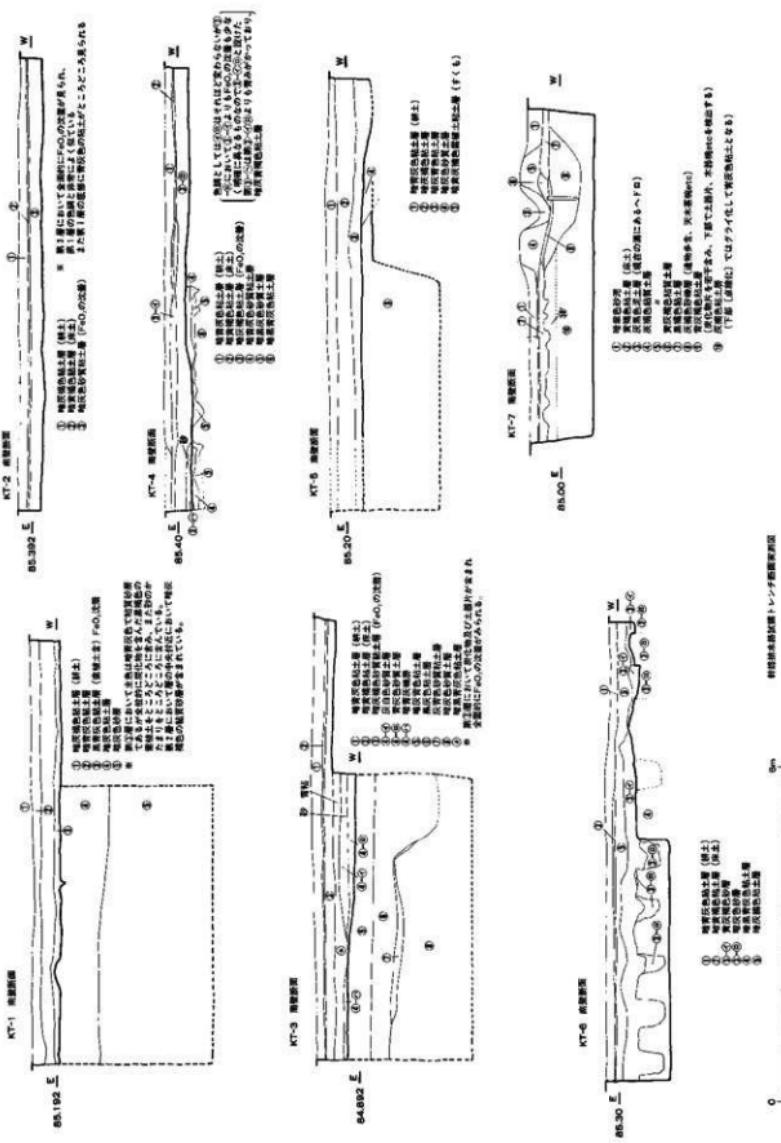


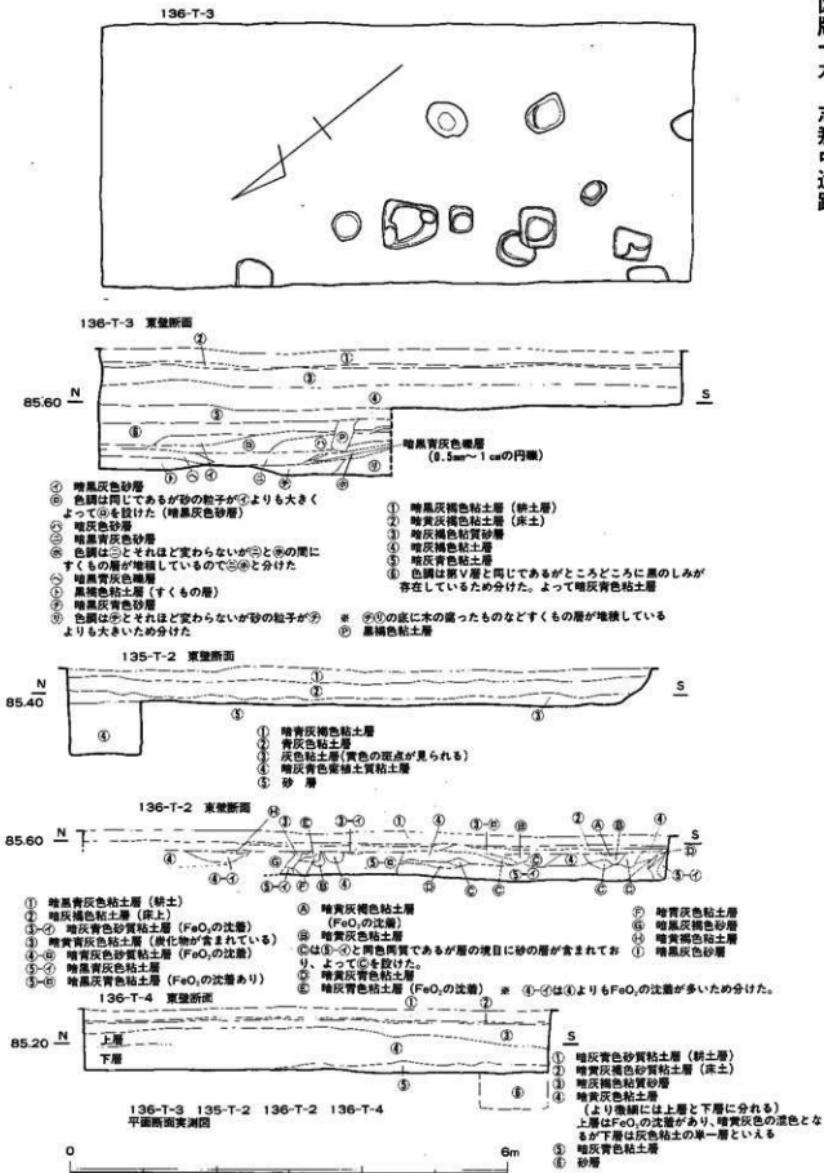
136-T-3東壁断面（西より）

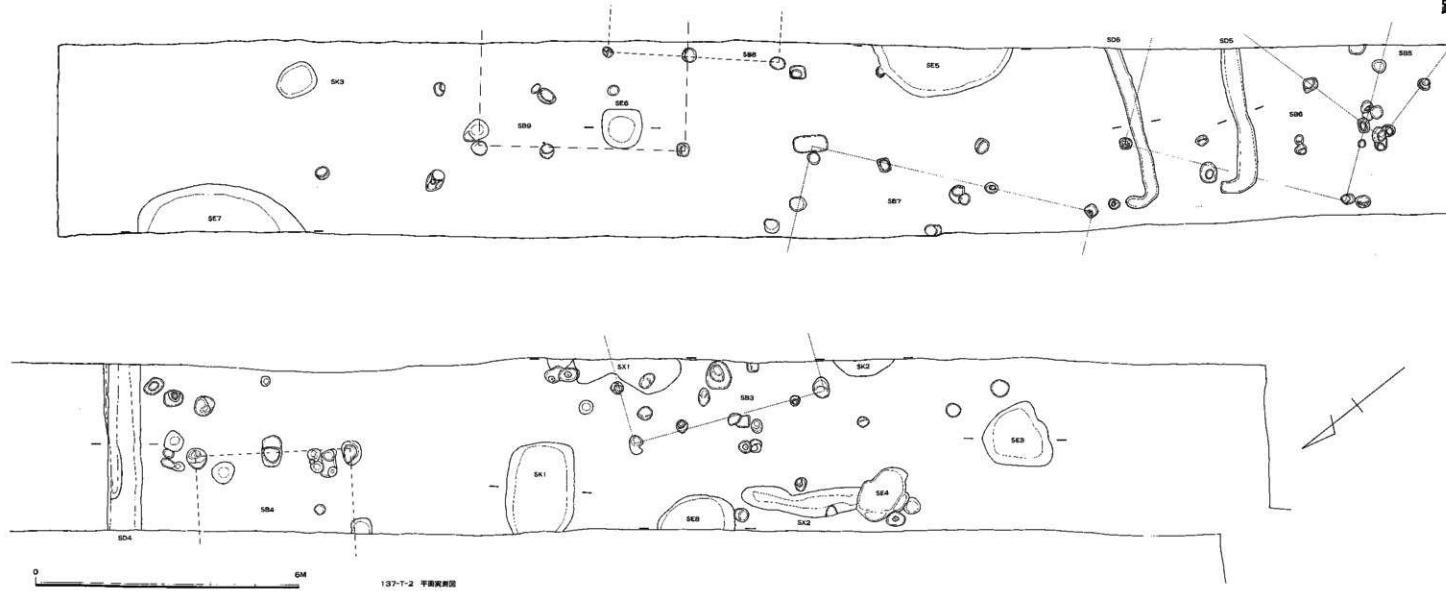


137-T-1東壁断面（西より）

図版十五 志那中遺跡

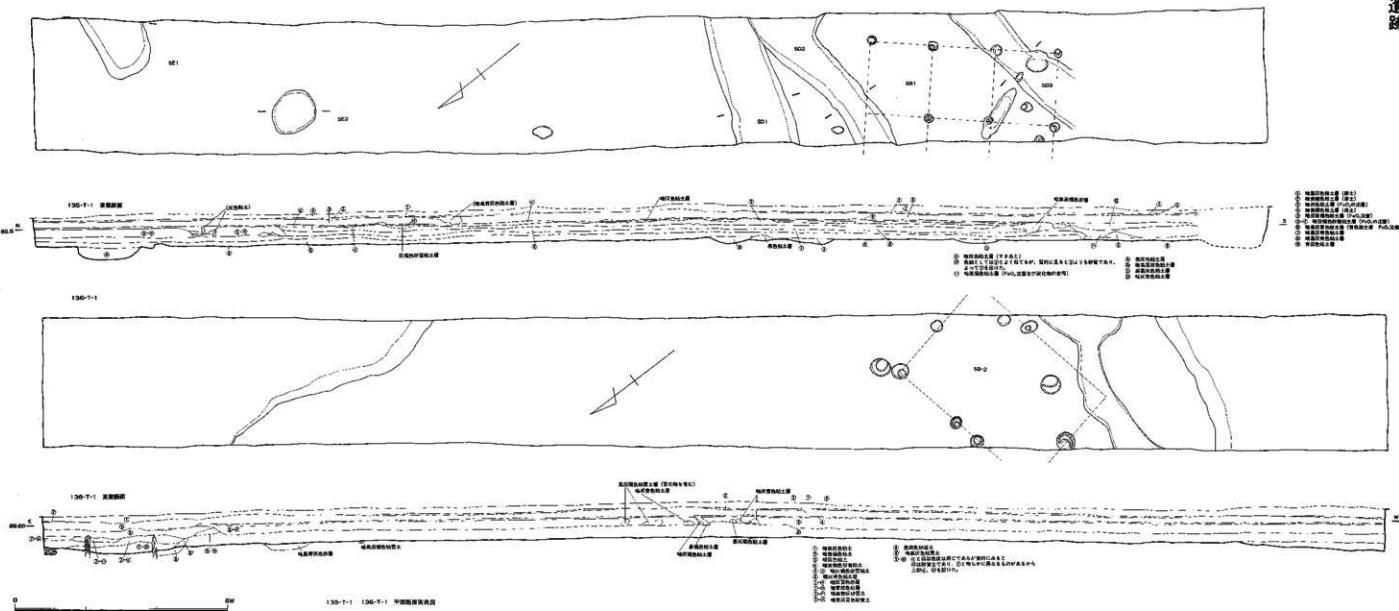




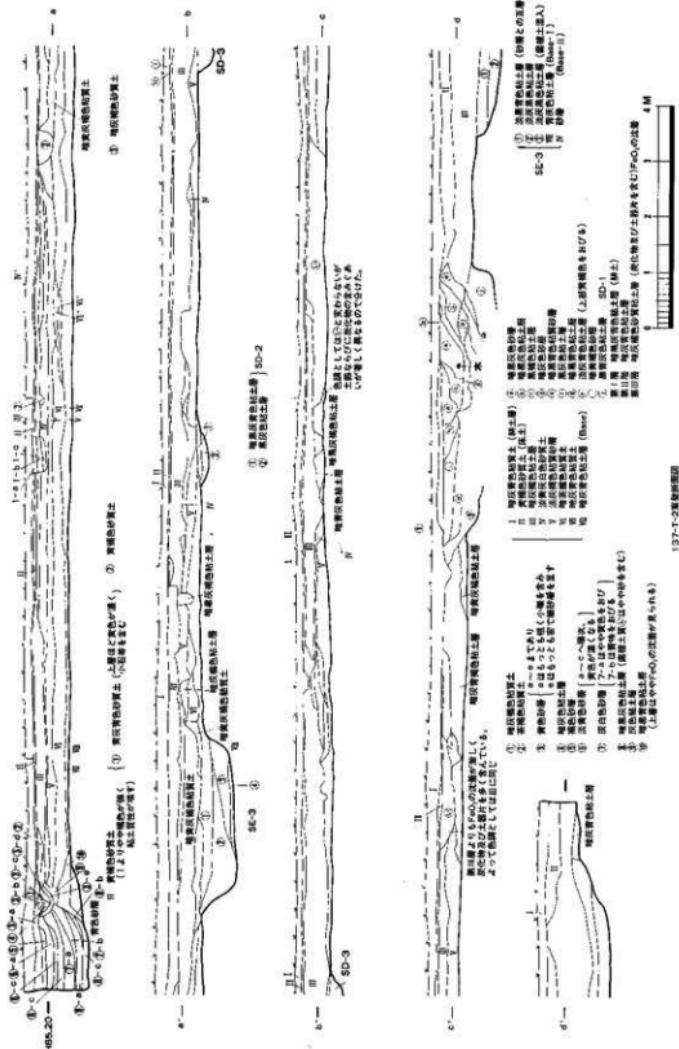


137-7-2 平面実測図

図版十八 志那中遺跡



図版十九 志那中遺跡



図版二十 正樂寺遺跡



調査前景（東より）



試掘坑掘削状況（北より）

図版二十一 正樂寺遺跡



K トレンチ全景（南より）

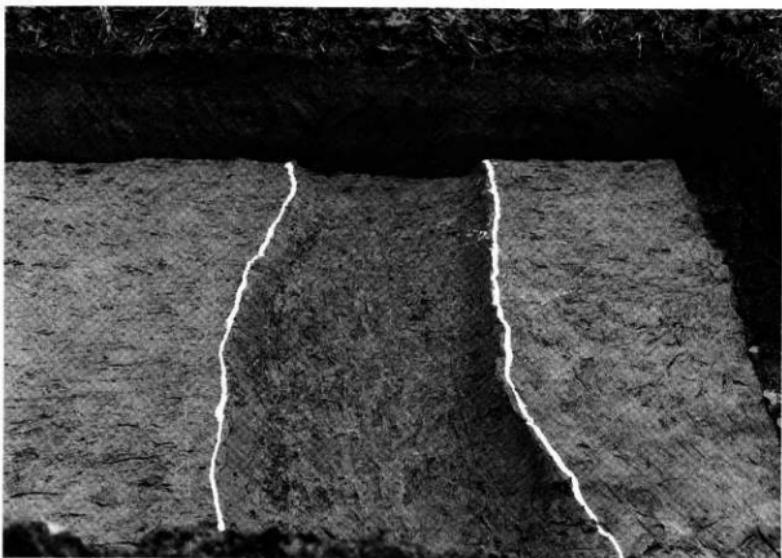


F トレンチ全景（南より）

図版二十二 正樂寺遺跡



Eトレンチ全景（北より）



Eトレンチ SD1近景（西より）

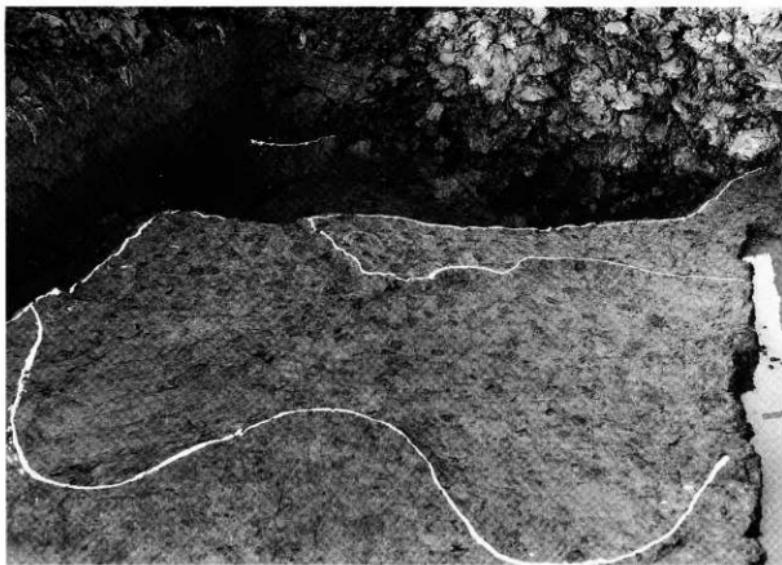


B トレンチ全景（南より）

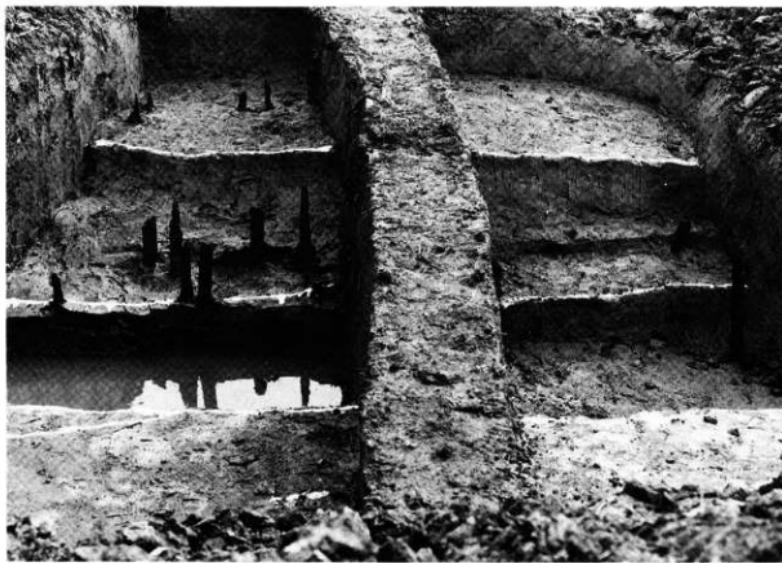


D トレンチ全景（西より）

図版二十四 正樂寺遺跡



トレンチ近景（西より）



トレンチ全景（南より）



J トレンチ東断面（西より）



B トレンチ ピット近景（南より）

昭和54年3月  
は場整備関係遺跡発掘調査報告書 VI-2

編集 滋賀県教育委員会  
発行 滋賀県教育委員会  
財団法人 滋賀県文化財保護協会  
印刷 宮川印刷株式会社